京都産業大学 コーオプ教育研究開発センター Ｆ工房

平成２６年度 活動報告書

Facilitation 工房

Keep Innovating.
京都産業大学

巻頭言

F 工房が開設されてからはや 6 年。最初の 3 年は文部科学省 2008（平成 20）年度学生支援 GP の採択事業として、その後の 3 年は学内予算で運営されてきたことになる。この場を借りてこの 3 年間の事業を振り返り、その成果と課題を整理したうえで、今後たどるべき道筋を探ってみたい。

この 3 年間に F 工房が行った事業を整理すると、１）各授業・部署との協働事業、２）ファシリテータ養成、３）学内外への発信、の 3 つに集約される。協働事業は正課内と正課外に大別できる。正課内ではまず、キャリア形成支援教育科目のなかにどっしりと根を下ろした。F 工房設立のきっかけとなった「キャリア・Reーデザイン I」、初年次生の三分の二が受講する「自己発見と大学生活」、この二つの科目においては、フラットな関係のなかで対話を促進するファシリテーションのマインドとスキルが定着している。次に授業との協働に注目してみると、初年次ゼミ教育における協働が法学部、文化学部、外国語学部とのあいだで進行、文化学部、理学部、コンピュータ理工学部とのあいだでは入学前教育や新入生オリエンテーションの運営を軸とする協働が始まっている。法学部との協働が深化し、初年次ゼミのファシリテータを養成するための科目運営において協働が進んでいることにも触れておきたい。正課外の領域においては、むすび芽フューチャーセッションをはじめ実に様々な団体・イベント・プロジェクトと協働できた。この領域での協働は 2014（平成 26）年度になって加速度的に増加しており、来年以降もこの傾向が続くものと思われる。

ファシリテータ養成事業においては、「自己発見と大学生活」のキャリファシと呼ばれる学生ファシリテータの養成とコーディネートを F 工房が担い、授業の質保障に貢献することができた。このほか、2013（平成 25）年度から F 工房主催のプログラムとして本学学生・教職員（2013 年度は学生のみ）を対象に「ファシリテーション Labo.」を企画し、開催した。内容としては、一つの講義 15 コマ分と同等の質のプログラムを提供できたと思っている。

学内外への発信に目を向けると、Web ページに掲載されている F 工房開発のアイスブレイクについて、複数の自治体の教育委員会からを利用したいとの申し出があり、教材として用いられることになった。また 3 年間で三大学より講演・ワークショップの依頼があった。学習の場におけるファシリテーションの有効性について研究にまとめ、大学教育学会、リメディアル教育学会、FD フォーラムなどで発表した。また本学教育支援研究開発センターが発行する「高等教育フォーラム」に積極的に投稿した。また、2015（平成 27）年 1 月には京都ジョブパークとの協働でシンポジウムを開催、キャリア教育の在り方について問題提起をするとともに、シンポジウムの運営そのものにも参加した。

最後に、来年度以降の方向性について述べておきたい。F 工房は来年度も存続が決まっているが、今後は単年度ごとに成果を出すことが求められている。上に述べたように、F 工房の事業は多岐にわたるが、今後最も注力すべきものは何かと問われれば「能動的学習（アクティブラーニング）の場におけるファシリテーションの主流化」だと答えたい。これまで培ってきたノウハウを整理しパッケージ化したものを用意したうえで、ゼミなど様々なアクティブラーニング系プログラムに参入していきたい、そしてその結果、そうしたプログラムを企画・運営する側がフツーにファシリテータとして行動するような文化を創造したいと考えている。

F 工房事業統括/文化学部教授　鬼塚哲郎

CONTENTS

巻頭言…… 1

第1部　平成26年度活動報告

1. 年間活動実績概要と利用人数（月別）…… 4
2. 事業報告 …… 9

1）F工房主催事業

・ファシリテーション研究会（春学期）・第18回ファシリテータ研修会…… 9
・ファシリテーション研究会（秋学期）……11
・第19回ファシリテータ研修会（秋学期）……12
・ファシリテーション Labo.（2014）……13

2）学内他部門との協働

■各学部
・文化学部スターティング・セミナー2014 ……21

■その他
・フレッシャーズ・コミュニケーション ……22
・WACE 第19回世界大会　学生参画企画 ……23

3）授業の支援

■キャリア形成支援教育科目
・「キャリア・Re-デザインⅠ」……24
・「キャリア・Re-デザインⅡ」……26
・「自己発見と大学生活」……27
・その他キャリア関連科目でのワークショップ運営など……30

■学部専門科目
・「法学部演習（久保先生）」……33
・「法学部演習（耳野先生）」……34
・「アジア文化基礎演習2」……36
・ゼミ間交流：荻野ゼミ（コンピュータ理工学部）×宮澤ゼミ（外国語学部）……37
・「法教育演習Ⅰ」……38

■学部初年次科目
・「プレップセミナー（法学部）」……41
・「入門セミナー（文化学部）」……42

■その他
・アイスブレイクの実施（初回授業等）……43

4）課外活動の支援

・学生FDスタッフ燦（SAN）……44
・英語研究会（ESS）……46
・第36回クラブリーダー研修会 ……49

5）学外での発表・講演

■他大学……51
■その他 ……52

6）学外への調査……56
7）コンサルティング ……58

第2部　活動から得られた知見

1.「キャリア・Re-デザインⅡ」の取組みについて……62
2. 2014（平成 26）年度　ファシリテーション認知度調査……66

活動を振り返って……70

参考資料

1. ファシリテーションの実践事例……73
2. 広報物作成 ……78
3. ファシリテーション Labo.（2014）ルポルタージュ ……79
4. 発表資料 ……80

第１部　平成２６年度活動報告

1. 年間活動実績概要と利用人数（月別）

４月　　来室者数　４３５名（学生４０８名、教員１９名、職員４名、学外４名）

1日（火）	相談業務	プレップセミナー（法学部）でのアイスブレイク運営相談（学生）
3 日（木）	学内他部門との協働	文化学部スターティング・セミナー2014
7 日（月）	授業の支援	イタリア語エキスパートⅠ
18 日（金）	授業の支援	法学部演習（久保）
21 日（月）	授業の支援	「キャリア・Re-デザインⅠ」職員ファシリテータ研修
23 日（水）	授業の支援	キャリア・ReーデザインⅠ
25 日（金）	授業の支援	プレップセミナー（久保）
	授業の支援	法学部演習（耳野）
	学内他部門との協働	文化学部スターティング・セミナー2014 ふりかえり会
30 日（水）	授業の支援	「自己発見と大学生活」第１回キャリファシの集い～全クラス共有編～
《複数日にわたり実施》		
毎週（月）、（火）、（水）、（木）、（金）		
	授業の支援	自己発見と大学生活
7 日（月）、21 日（月）		
	授業の支援	入門セミナー（文化学部/久米）
9 日（水）、26 日（土）～27 日（日）		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅡ

５月　　来室者数　３６２名（学生３３７名、教員１８名、職員１名、学外６名）

1 日（木）	相談業務	ゼミ（法学部）でのアイスブレイク運営相談（学生）
2 日（金）	授業の支援	法学部演習（耳野）
	相談業務	イベントのワークショップ・デザイン相談（学生）
21 日（水）	授業の支援	「自己発見と大学生活」第３回キャリファシの集い～全クラス共有編～
《複数日にわたり実施》		
毎週（月）、（火）、（水）、（木）、（金）		
	授業の支援	自己発見と大学生活
7 日（水）、17（土）～18（日）、28 日（水）		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ
8 日（木）、9 日（金）		
	授業の支援	大学生活と進路選択
12 日（月）、13 日（火）、15 日（木）、16 日（金）		
	授業の支援	「自己発見と大学生活」第２回キャリファシの集い～授業内容伝授編～
14 日（水）、31 日（土）		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅡ

６月　　来室者数　３３６名（学生３０５名、教員１２名、職員１６名、学外３名）

3 日(火)	相談業務	むすび芽フューチャーセッション運営相談(職員/計 2 回)
	相談業務	プレップセミナー(法学部)でのアイスブレイク運営相談(学生)
5 日(木)	授業の支援	アジア文化基礎演習 2
	学内他部門との協働	第 2 回むすび芽フューチャーセッション
6 日(金)	授業の支援	プレップセミナー(久保)
9 日(月)	授業の支援	「自己発見と大学生活」第 4 回キャリファシの集い ～全クラス共有編～
20 日(金)	学内他部門との協働	第 3 回むすび芽フューチャーセッション
27 日(金)	課外活動の支援	ESS×F工房　コラボ企画　第1弾/チアパーソン向上セミナー
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(水)、(木)、(金)		
	授業の支援	自己発見と大学生活
1 日(日)、18(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅡ
11 日(水)、25 日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ

７月　　来室者数　２５５名（学生２２１名、教員１４名、職員１３名、学外７名）

2 日(火)	課外活動の支援	学生 FD スタッフ燦(SAN)メンバーへのファシリテーション研修
14 日(月)	相談業務	教育寮サマーセミナー運営相談(学生)
23 日(水)	授業の支援	「法教育演習Ⅱ」ふりかえり会
	授業の支援	「キャリア・Re-デザインⅠ」全体ふりかえり会
《複数日にわたり実施》		
毎週(月)、(火)、(水)、(木)、(金)　※7 月 22 日(火)まで		
	授業の支援	自己発見と大学生活
8 日(火)、11 日(金)		
	学内他部門との協働	第 4 回むすび芽フューチャーセッション

８月　　来室者数　２４名（学生６名、教員８名、職員８名、学外２名）

1 日(金)	相談業務	SD フォーラム　分科会テーマ設定相談(職員/計 2 回)
7 日(木)、 8 日(金)	授業の支援	「自己発見と大学生活」キャリファシ　ふりかえりの集い
24 日(日)	課外活動の支援	学生 FD サミット 2014 夏　第 4 分科会

９月　　来室者数　６７名（学生４０名、教員１１名、職員１２名、学外４名）

10 日(水)～ 11 日(木)	授業の支援	「自己発見と大学生活」キャリファシ・ガイドライン作成合宿
17 日(水)	主催事業	ファシリテーション研究会・第 18 回ファシリテータ研修会

１０月　　来室者数　１０４名（学生７５名、教員８名、職員１５名、学外６名）

15 日(水)	主催事業	ファシリテーション Labo.
16 日(木)	授業の支援	「自己発見と大学生活」キャリファシ　ふりかえりの集い(欠席者対象)
24 日(金)	課外活動の支援	ESS×F工房　コラボ企画　第2弾/ Let's stich!
30 日(木)	相談業務	ピアサポーターむけ人権研修会　運営相談(職員)
《複数日にわたり実施》		
8 日(水)、29 日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ
20 日(月)、23 日(木)		
	授業の支援	大学生活と進路選択

１１月　　来室者数　８５名（学生６６名、教員１０名、職員８名、学外１名）

6 日(木)	授業の支援	アジア文化基礎演習 2
11 日(火)	相談業務	世界問題研究所主催　学生ワークショップ　運営相談 (学生/計 6 回)
22 日(土)～ 23 日(日)	学外への調査	日本キャリア教育学会第 36 回研究大会
26 日(水)	相談業務	グローバル・サイエンス・コース、月例交流イベント Global Saloon 運営相談(職員)
《複数日にわたり実施》		
8 日(水)～9 日(日)、12 日(水)、19 日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ
5 日(水)、29 日(土)～30 日(日)		
	主催事業	ファシリテーション Labo.

１２月　　来室者数　７６名（学生５９名、教員２名、職員１１名、学外４名）

12 日(金)	相談業務	2015 年度コンピュータ理工学部　新入生オリエンテーション 運営相談(職員/計 4 回)
18 日(木)	相談業務	2015 年度フレッシャーズ・コミュニケーション　運営相談 (職員/計 3 回)
26 日(金)	授業の支援	法教育演習Ⅰ
《複数日にわたり実施》		
3 日(水)		
	授業の支援	キャリア・Re-デザインⅠ
17 日(水)、24 日(水)		
	主催事業	ファシリテーション Labo.

１月　　来室者数　１４５名（学生９９名、教員１６名、職員２０名、学外１０名）

8 日(木)	課外活動の支援	第 36 回クラブリーダ研修会　運営相談(学生/計 6 回)
19 日(月)	主催事業	ファシリテーション Labo.番外編「分人ワークショップ」
20 日(火)	学内他部門との協働	WACE第 19 回世界大会 学生参画企画 第 1 回ミーティング
23 日(金)	高大連携	京都産業大学附属高等学校 「キャリア・デザイン」プレゼンテーション大会　参観・審査
28 日(水)	相談業務	2015 年度理学部 入学前教育　運営相談(職員/計 2 回)
30 日(金)	学外での発表・講演	一橋大学　アカデミック・キャリア講習会での講演
31 日(土)	学外での発表・講演	京都ジョブパーク 共催シンポジウム プレイベントin 京都ジョブパーク
《複数日にわたり実施》		
9 日(金)、16 日(金)		
	授業の支援	法教育演習Ⅰ

２月　　来室者数　１０５名（学生５３名、教員３１名、職員９名、学外１２名）

5 日(木)	相談業務	文化学部スターティング・セミナー2015　運営相談(教員)
10 日(火)	課外活動の支援	第 36 回クラブリーダ研修会の運営に向けた 志学会執行委員会メンバーへのファシリテーション研修会
12 日(木)	課外活動の支援	第 36 回クラブリーダ研修会
18 日(水)	主催事業	ファシリテーション研究会
《複数日にわたり実施》		
20 日(金)、24 日(火)		
	授業の支援	2015 年度「自己発見と大学生活」 学生ファシリテータ研修 第 1 回①、②

３月　　来室者数　１０６名（学生６７名、教員１６名、職員１５名、学外８名）※３月２５日現在

18 日(水)	主催事業	第 19 回ファシリテータ研修会
24 日(火)	学内他部門との協働	2015 年度理学部 入学前教育 先輩学生への事前研修
25 日(水)	学内他部門との協働	2015 年度コンピュータ理工学部 新入生オリエンテーション 先輩学生への事前研修
27 日(金)	学内他部門との協働	2015 年度フレッシャーズ・コミュニケーション 先輩学生への 事前研修
30 日(月)	学内他部門との協働	2015 年度理学部 入学前教育
《複数日にわたり実施》		
3 日(火)、6 日(金)		
	授業の支援	2015 年度「自己発見と大学生活」 学生ファシリテータ研修 第 2 回①、②
10 日(火)、13 日(金)		
	授業の支援	2015 年度「自己発見と大学生活」 学生ファシリテータ研修 第 3 回①、②

17 日（火）、20 日（金）		
	授業の支援	2015 年度「自己発見と大学生活」 学生ファシリテータ研修 第 4 回①、②
23 日（月）、31 日（火）		
	授業の支援	2015 年度「自己発見と大学生活」担当教員研修①、②
26 日（木）、27 日（金）		
	学内他部門との協働	文化学部スターティング・セミナー2015 先輩学生への事前研修

年間来室者のべ総数

2,100名

学外からの来訪および問合せ件数

他大学からの来訪 …2件

Web ページ掲載情報に関する問合せ …2件

［問合せ詳細］

（1）茨城県教育庁生涯学習課学習支援担当

「人権教育指導資料」へのアイスブレイク掲載

（2）神奈川県教育委員会教育局行政部行政課人権教育グループ

「人権学習のための参加体験型学習プログラム集 第2集」へのアイスブレイク掲載

提供したプログラムへの参加者数

プログラムへの参加者のべ総数 …4,470名

学生ファシリテータとしての参加者数… 82名

※3月25日現在

2. 事業報告

1）F工房主催事業

ファシリテーション研究会（春学期）・第18回ファシリテータ研修会

□テーマ・趣旨

［午前：研究会］本学で実践するファシリテーションを共に考えよう

学内で実践されているファシリテーションの様々な現場を取り上げ、そこでのファシリテーションの導入の目的と成果・課題を共有し、教職員・学生それぞれの目線から、参加者とともに共通点や相違点を探る。

［午後：研修会］「キャリア・Re-デザインⅡ」での実践報告とプログラム体験

キャリア形成支援教育科目「キャリア・Re-デザインⅡ」で実施しているラジオドラマ作成のワークショップを体験し、対話と会話や討論との違いは何か、対話を促進するファシリテーションとは何かについて考える。

□概要

日　時　　9月17日（水）10:00-16:40
場　所　　4号館4H演習室
参加者　　［午前］37名（登壇者：6名、本学学生：5名、教員：3名、職員16名、学外：7名）
　　［午後］26名（本学学生：7名、教員：5名、職員：5名、学外：9名）

□内容

［午前：研究会］

学内でファシリテーションを実践する各現場からの実践報告とパネルディスカッションを実施。教員からは、アクティブラーニングの実践例や複数クラス開講に伴う複数の担当教員との連携方法、キャリア教育と専門教育（学部初年次ゼミ）におけるファシリテータのかかわり方の違いについて報告があった。学生からは、実際の現場でファシリテータ活動をする中での自分に対する気付きや変化、受講生と接する際に心がけていることが報告される中で、各現場のプログラムやファシリテータとしての振舞いについて、それぞれの共通点や相違点を探る機会になった。

〈パネリスト〉

教員：鬼塚哲郎（「キャリア・Re-デザインⅠ」統括教員）、下田幸男（外国語学部「基礎演習」主担当教員／外国語学部准教授）、松尾智晶（「O/OCF-PBL」、「自己発見と大学生活」担当教員／全学共通教育センター准教授）

学生：赤見文雄（「自己発見と大学生活」キャリファシ）、乙倉孝臣（学生FDスタッフ「燦」メンバー）、南良嗣（「キャリア・Re-デザインⅠ」学生ファシリテータ）

〈モデレーター〉

大谷麻予（F工房担当コーディネータ）

［午後：研修会］　運営：F工房スタッフ

グループ分け、アイスブレイク

4人もしくは5人1組に分けた後、グループ内で自己紹介。

実践報告　「キャリア・Re-デザインⅡ」での試み

今年度春学期より開講した「キャリア・Re-デザインⅡ」の取組みを紹介。特に、クリエイティブなものをキャリア教育に取り入れたラジオドラマ作成のワークショップについて、授業の現場で起こったことを紹介した。

ワークショップ　「キャリア・Re-デザインⅡ」を体験する

同科目で実践しているラジオドラマ作成ワークショップの簡易版を体験。テーマは「私のターニングポイント（過去編）」とし、過去の自分のターニングポイントとなった一場面を切り取り、フィクションを交えたラジオドラマに仕上げた。具体的には、コンセプト（140字）、プロット（400字）を作成。各自のプロットをグループ内で共有し意見交換を行った後、スクリプトを個人で作成。完成したスクリプトのうち、グループで1作品を選出し、配役を決め、練習を行ってから録音をした。その後、全体で録音データを聞き、その感想を議論した後にプログラムについて振り返る流れとした。

□成果・課題

［研究会］

今回の研究会の最大の成果は、共通教育（大規模・小規模クラス）、専門教育、学生の自主的活動など、多様な場面において「ファシリテーション」という手法や考え方が現場に合わせて組み込まれていることを共有し合えたことである。キャリア科目でのファシリテーションは、受講生同士や運営側と受講生の関係性に重きを置くが、専門科目においては、そうした関係性を意識しながら、いかに学問との接続を行うかが重要であるとの指摘が登壇した教員からあった。また、学生ファシリテータからは、「教員や年上の人は上から目線になりがちで、学生のコミュニティにとって異物となりがちである。だからこそ、学生のファシリテータとして、上からでも下からでもない同じ目線で、相手の尊敬できるところを見ながらかかわることが重要だと思う。」という率直な意見表明があり、会場に大きなインパクトをもたらした。今後は、ファシリテーションの教育的な意義について、様々な現場での知見を結集しつつ、研究成果として示していく必要があるだろう。

［研修会］

今学期開講した「キャリア・Re-デザインⅡ」の取組みを関係者と共有できたこと自体が大きな成果であった。同科目は、クリエイティブな作業を通じて自己開示を促進し、作品の中にフィクションを織り交ぜることで対話のハードルを下げ、作者以外が演じることで、その後の合評会での対話が活性化する仕掛けになっていたが、そのプロセスを本研修会の参加者と少しではあるが共有することができた。

一方で、本プログラムのどこにファシリテーションの知見が生かされているのか、ファシリテータとして何を重視してプログラムを組み立て、運営したのかが参加者に伝わりづらい設計となっていた。ファシリテータ研修会本来の意図から少し外れたプログラムデザインになっていたことは次回への課題と言える。

ファシリテーション研究会（秋学期）

□テーマ・趣旨

F 工房は年に 2 回、「ファシリテーション研究会」と「ファシリテータ研修会」を同日に開催してきた。前者はファシリテーションに関する専門的な知識を深める場として開催し、後者は体験とその振り返りを通じてファシリテーションの基礎を学ぶことを目的に開催してきたが、今回から目的ごとに別日程で開催することにし、2 月に「ファシリテーション研究会」を開催した。

本研究会では、実用的スキルとしてのファシリテーションを保留し、西洋哲学に代表される人文諸学の観点からファシリテーションの普遍性について探究することを目的に開催。

□概要

日　時　　2 月 18 日（水）14:00-16:00
場　所　　12 号館 12201 教室
参加者　　37 名（本学学生：7 名、教員：7 名、職員：6 名、学外：17 名）
講　師　　山田　創平 氏
　　（京都精華大学人文学部准教授／本学全学共通教育センター非常勤講師）
テーマ　　「思想としてのファシリテーション ―人文諸学の系譜をたどりながら、ファシリテーションの意義を考える―」

□内容

講演

学問の起源と言われるギリシャ哲学から 18 世紀のイマヌエル・カントに至る一連の西洋哲学の流れが紹介された。特に、カントが二千年に及ぶ哲学の歴史を踏まえて言った「他者を手段としてではなく、目的として扱え」という言葉は、大学でファシリテーションやキャリア教育を実践する者が常に参照すべき点である。私たちがいる近代大学は、カント的な理念によってつくられ、その眼目は徹底的に考え、自由に学び、平和と平等を実現するために徹底した対話と議論を行うことにある。従って、ファシリテーションを大学で実践する際にも、常にこのことを意識することが肝要である。という内容であった。

質疑応答、意見交換

講演を聞いて、印象に残っていることを 1 つ付箋紙に書き出して、それを全体で共有し、その後全体で意見交換を行った。

□成果・課題

講師の山田氏は、本学で 9 年にわたりキャリア科目に携わってこられた。その経験を踏まえた講演は、実践部分に注視しがちな我々が忘れてはいけない、大学の本来的な意義を示してくれる大変有意義なものであった。

また、講演終了後は講師と参加者有志 16 名が F 工房で振り返りを兼ねた座談会を行った。氏への質疑応答から始まり、途中からは参加者それぞれがどのように大学と向き合っているかについて、立場や属性に関係なく、熱く深い対話が展開された。

ファシリテータ・トレーニング連続講座「ファシリテーション Labo.（2014）」

□テーマ・趣旨

F 工房主催イベント「ファシリテーション Labo.（ラボ）」は、合宿を含む計 26 時間の連続講座として学内の学生、教職員を対象に開催。2 年目となる今年度の目的は、(1) ファシリテータとして大切にしたい心構えや考え方、あり方などを総称した「ファシリテータマインド」について、その歴史や理論的背景を含めて体系的に学ぶこと。(2)「ファシリテータマインド」を意識しながら、ファシリテーションのスキルおよび（それを熟達するために必要な）ディシプリン（修練）について体験を通して学び、自らが抱える現場で主体的にファシリテータとして活動できるようになること、の 2 つを設定した。

本イベントでは、ファシリテータを「人と人とが協働する場面において【①その場に安心感を生み出す、②メンバーの〈前のめり〉を引き出す、③対話の場を創り出す】働きをする人」と定め、そのために必要な心構えや考え方、あり方について学ぶことに主眼を置いた。

それらを体系的に学ぶための過程として、講座の 1 回目でアイスブレイクを行い参加者同士が学びの共同体になることを目指し、2〜4 回目はインプットのタームとして、ミニレクチャーを通して理念や歴史、理論を学び、体験を通して技能や手法、習慣を学ぶ場とした。4 回目後半〜5 回目ではグループでアイスブレイクワークを開発するアウトプットの場となるように構成した。また、全回を通してファシリテーション込みのワークショップ形式で講座を行い、いずれのワークも【体験→振り返り→小講義】の手順で行った。

講座を受ける際の心構えとして、【①自分もメンバーも楽しい場に（自分がこの場を楽しむのは当然として、他のメンバーも楽しいと思える場となるよう他者を尊重する）、②自分のこころに素直になる（自分が何をどう感じているのかをいつも以上に意識するとともに、しんどいと思ったら無理をせずに訴える）、③周りの人からどんどん盗みましょう（講座の中で時空間を共にする人の様子を観察し、いいなと思ったことは真似るようにする）、④ここでの体験を日常に持ち込む（この場の体験を特別なものとするのではなく、ここで学んだことを日常の生活にも応用することを意識する）】の 4 つを共有しながら行った。

なお、今回の「ファシリテーション Labo.」では、各回終了後にその回の内容をまとめたルポルタージュを作成した。このルポルタージュは、参加者と一緒に講座を受けていた F 工房スタッフが記述を担当したため、参加者に近い視点で講座の様子を描いている。このルポは、次回講座で参加者に配布し前回の講座を振り返るためのデータとした他、F 工房のホームページ上に公開し F 工房の取組みを発信するツールとしても活用した。（p.79 参照）

□概要

日　時　　下表のとおり　※時間はいずれも 13:30〜16:30（合宿講座は除く）

ファシリテータ・トレーニング連続講座「ファシリテーション Labo.（2014）」

□テーマ・趣旨

F 工房主催イベント「ファシリテーション Labo.（ラボ）」は、合宿を含む計 26 時間の連続講座として学内の学生、教職員を対象に開催。2 年目となる今年度の目的は、(1) ファシリテータとして大切にしたい心構えや考え方、あり方などを総称した「ファシリテータマインド」について、その歴史や理論的背景を含めて体系的に学ぶこと。(2)「ファシリテータマインド」を意識しながら、ファシリテーションのスキルおよび（それを熟達するために必要な）ディシプリン（修練）について体験を通して学び、自らが抱える現場で主体的にファシリテータとして活動できるようになること、の 2 つを設定した。

本イベントでは、ファシリテータを「人と人とが協働する場面において【①その場に安心感を生み出す、②メンバーの〈前のめり〉を引き出す、③対話の場を創り出す】働きをする人」と定め、そのために必要な心構えや考え方、あり方について学ぶことに主眼を置いた。（図 1 参照）

それらを体系的に学ぶための過程として、講座の 1 回目でアイスブレイクを行い参加者同士が学びの共同体になることを目指し、2〜4 回目はインプットのタームとして、ミニレクチャーを通して理念や歴史、理論を学び、体験を通して技能や手法、習慣を学ぶ場とした。4 回目後半〜5 回目ではグループでアイスブレイクワークを開発するアウトプットの場となるように構成した。また、全回を通してファシリテーション込みのワークショップ形式で講座を行い、いずれのワークも【体験→振り返り→小講義】の手順で行った。（図 2 参照）

講座を受ける際の心構えとして、【①自分もメンバーも楽しい場に（自分がこの場を楽しむのは当然として、他のメンバーも楽しいと思える場となるよう他者を尊重する）、②自分のこころに素直になる（自分が何をどう感じているのかをいつも以上に意識するとともに、しんどいと思ったら無理をせずに訴える）、③周りの人からどんどん盗みましょう（講座の中で時空間を共にする人の様子を観察し、いいなと思ったことは真似るようにする）、④ここでの体験を日常に持ち込む（この場の体験を特別なものとするのではなく、ここで学んだことを日常の生活にも応用することを意識する）】の 4 つを共有しながら行った。（図 3 参照）

なお、今回の「ファシリテーション Labo.」では、各回終了後にその回の内容をまとめたルポルタージュを作成した。このルポルタージュは、参加者と一緒に講座を受けていた F 工房スタッフが記述を担当したため、参加者に近い視点で講座の様子を描いている。このルポは、次回講座で参加者に配布し前回の講座を振り返るためのデータとした他、F 工房のホームページ上に公開し F 工房の取組みを発信するツールとしても活用した。（p.79 参照）

□概要

日　時　　下表のとおり　※時間はいずれも 13:30〜16:30（合宿講座は除く）

場　所　　（第 1 回）4 号館 4G 演習室、（第 2 回、第 4 回、第 5 回）4H 演習室、（合宿講座）松の浦セミナーハウス
参加費　　合宿にかかる費用（食費、現地までの交通費）だけ参加者負担
参加者　　32 名（各回の参加者は下表のとおり）

日程		テーマ	参加者
10 月	15 日	アイスブレイクの意義を体感する	28
11 月	5 日	ファシリテーションの機能とミッションを理解する	17
	29 日（合宿）	ファシリテータマインドの根っこに触れる 対話を通して話し合いのカタチを考える	22
	30 日（合宿）	「参加型の場」をつくるポイントを押さえる ファシリテーションのマインドと手法を実地に学ぶ	22
12 月	17 日	実際にワークショップをデザインする	19
	24 日	ファシリテータとして活躍する	16

□内容

［第 1 回］「アイスブレイクの意義を体感する」

オリエンテーション

「ファシリテーション Labo.」の目的とファシリテーション、ファシリテータの定義、講座の進め方、講座を受ける際の心構えについて、参加者全員と共有した。（詳細は上記および図 1〜3 を参照）

アイスブレイク「マスを 21」

F 工房オリジナルのアイスブレイク。番号のみが書かれた 21 マスのワークシートに、進行役が指定するお題の答えを記入していくワーク。その過程で個人ワーク、ペアワーク、グループワーク、全体ワークなどを織り交ぜていくのが特長的。

ミニレクチャー「アイスブレイクの意義」

アイスブレイクの理論的背景として、K. Lewin（クルト・レヴィン）の「Unfreezing（解凍）→Moving（変化）→Refreezing（再冷凍）」モデルを紹介。人が変化する際にはその前段階として「Unfreezing（解凍）」のプロセスが必要であり、その解凍プロセスとして「アイスブレイク」が重要であると説明。この日行ったアイスブレイクは、この「ファシリテーション Labo.」全体の解凍プロセスでもあった。

まとめ「カタカナ語日本語選手権」

最後に、この日のアイスブレイク体験を振り返って、「アイスブレイク」というカタカナ語を日本語で表現するとしたら、をお題としたワークを実施。参加者からは「場を温める」、「居心地を良くする」、「おとおし」、「相互理解」などが出された。

［第 2 回］「ファシリテーションの機能とミッションを理解する」

体験①アイスブレイク「ホップ・ステップ・ニックネーム」

4 人 1 組になって、お互いにどんな人なのかを聞き合う（ホップ）。その上でお互いのニックネームを付け合う（ステップ）。最後に全体会で全員のニックネームを覚え合う（ニックネーム）。の 3 段階を経るワーク。ホップの段階では「お話のきっかけ Question」として「好きな○○」や「タイムマシンがあったらいつに行く？」など、30 個ほどの質問が書かれたシートを配布し、それをもとにグループ内で話し合う工夫を採り入れた。また、ステップの段階では、メンバーそれぞれのニックネームを考えそれを付箋紙に書いて相手の前に置いていき、本人はその中から好きなものを選べるようにした。

ミニレクチャー「グループ活動に生じる懸念と自己防衛」

人と一緒に活動する時に抱える不安や心配事などについて、J. Gibb（ジャック・ギブ）の理論モデルを紹介。自己防衛を生み出す【4 つの懸念】と【自己防衛を高める／低める 6 つの態度】について説明した。ギブは、「受容懸念」、「データの流動的表出懸念」、「目標形成懸念」、「社会的統制懸念」の 4 つの懸念がグループ活動の際に生じるとした。また、同じくギブが提示した自己防衛を高める（アイスブレイクを阻害する）6 つの態度と、自己防衛を低める（アイスブレイクを促進する）6 つの態度についても紹介した。

体験②グループワーク「自らが経験した懸念について振り返る」

ミニレクチャーの話を踏まえ、実際に参加者自身が普段のグループ活動で感じる懸念について考えるワークを実施。付箋紙に「実際に感じたことがある懸念」と「そのシチュエーションにおいて、相手が具体的にどのような態度だったか」を色別に記入し、模造紙に貼り出して共有。その後、出た意見に対して、「懸念に対する解決策やアドバイス」を別の色の付箋に書き出し、それを全体で共有して終了とした。

［第 3 回（合宿）］ ファシリテーションのマインドとスキルを集中的に学ぶ

（1 日目午後）「ファシリテータマインドの根っこに触れる」

合宿オリエンテーション、アイスブレイク

合宿での目的とプログラムを共有した後、4 人 1 組になって名前や近況、前回講座の感想を話し合う「チェックイン」を実施。その後、全員で屋外に出てボールを投げ合いながらニックネームを覚えるワーク「ネーム de キャッチボール」を実施。前回覚え合ったニックネームを思い出すと同時に、前回休んでいた人のニックネームを新たに覚えることを目的に行った。

体験①グループワーク「タップロット」

カードに書かれた断片的な情報を組合せ、チームで課題を解決するワーク「タップロット（星野欣生・津村俊充（2001）Creative human relations 人間関係トレーニングマニュアル集，プレスタイム）」を実施。

体験②ふりかえり「タップロットのプロセスを振り返る」

振り返りシートを個人で記入した後、それをグループで共有。そしてグループ内のプロセスを振り返りながら、正解まで導けたグループはその要因、正解まで至らなかったグループもその要因をそれぞれ考え、それを模造紙にまとめて発表を行った。

ミニレクチャー「コンテンツとプロセス、振り返りの意義」

グループ活動の 2 つの側面として「コンテント」と「プロセス」を紹介。「津村俊充（2012）プロセス・エデュケーション―学びを支援するファシリテーションの理論と実際，金子書房」を引用しながら、グループ活動時に話されたり、書かれたりするものを「コンテント」、そのコンテントが算出されるまでのあらゆる事象を「プロセス」とし、ファシリテータはこの「プロセス」に着目することが求められると紹介。また、K. Lewin が発見したラボラトリー方式の体験学習についても説明し、振り返ることの重要性を共有した。

（1 日目夜）「対話を通して話し合いのカタチを考える」

ミニレクチャー「対話とは」

対話の定義を E. Schein（エドガー・シャイン）や W. Isaacs（ウィリアム・アイザックス）に依拠しながら説明。自己と他者の信念や価値観が衝突した時、それを一旦保留して、共通の基盤を見つけたり、価値観のすり合わせを試みたりするコミュニケーションを対話として紹介。価値観を闘わせるような議論やディベートとは区別して使用する。

体験①グループワーク「対話の実践」

このメンバーと語りたいことを考え、それをキーワード化したうえでフリップに記入し、互いに見せ合いながら似たようなテーマを掲げている人同士でグループになって、そのメンバーと対話を行った。

体験②ふりかえり

対話終了後は、対話を体験してみての感想をグループ内で話し合った後、それを全体で共有した。

（2 日目午前）「「参加型の場」をつくるポイントを押さえる」

アイスブレイク「ダンス・ワークショップ」

グループに分かれて、4 拍子のリズムに合わせたダンスを考え、それを 4 つ打ちのリズムに合わせてみんなで踊るというもの。上半身の振り付けを考えるグループとステップの振り付けを考えるグループに分け、それを順番に組合せて踊る。

体験①「カラーマーカーの使い方を覚える」

ワークショップなどでよく使う、太いカラーマーカーの使い方を伝授。状況に応じてペンの太さを使い分けたり、色の組合せを変えたりする工夫を体験した。

体験①「参加型の場の設えを考える」

椅子と机の配置の仕方によって、参加者はどのように感じるのかを体験。ロの字、八角形、スクール形式、准スクール形式、シアター型、扇型、サークル型、授業参観型、アイランド型、斜めアイランド型など、全10種類を体験し、それぞれの形の時にどのような印象を受けたかを付箋紙に書いて最後に全体で共有した。

(2日目午後)「ファシリテーションのマインドと手法を実地に学ぶ」

体験①「模擬コンサルティング（ペア)」

ペアになって、相手の「今抱えている問題、変えたい場」をヒアリングし、その場にファシリテーションがどう活かせるかを考えるワーク。相手が実際に抱えている日常の課題について聞き取ってメモし、意図を確認しながら話を進める。この講座でこれまで学んできたことを、話のコンテンツとプロセスの両面に活かせるようになっている。

体験②「模擬コンサルティング（グループ)」

4人グループの1人が相談者となって、グループの他のメンバーに「今抱えている問題、変えたい場」について相談。他のメンバーはその人の抱える悩みを聞き出しながら、解決策を提案するワーク。話し合いは壁に貼った模造紙に記録しながら進め、ファシリテーション・グラフィックという手法を意識しながら行った。グループで話し合われた内容は最後に全体で発表して共有した。

［第4回］「実際にワークショップをデザインする」

体験①アイスブレイク「『ファシラボ』のこれまでとこれから」

「これまでの『ファシラボ』を振り返って、印象深い体験は何でしたか？」というお題について、近くに座っている人たちで話し合うチェックインを実施。その後、これまでの講座の流れを振り返り、今後の講座の流れを確認した。

体験②グループワーク「これまでの『ファシラボ』を振り返って」

A4白紙を半分に折り、上段に「これまでの『ファシラボ』を振り返って、自分にとっての学びや気づきは何でしたか？」、下段に「これまでの『ファシラボ』を振り返って、自分の中でモヤモヤしていることは何ですか？」について、それぞれキーワードを記し、それを4人1組のグループで話し合った。

ミニレクチャー「人権について考える」

ファシリテータとして必ず意識したい人権について説明。具体的には、人種、民族、国籍、出自、宗教、障害、ジェンダー/セクシュアリティ等に関する多様性について考え、その多様性を認め合える場をつくるためにファシリテータが配慮すべき点について紹介。

体験③グループワーク「オリジナルのアイスブレイク開発」

これまでの講座で学んできたことを踏まえ、最終的なアウトプットとしてグループでオリジナルの「アイスブレイクワーク」を開発する。そのための準備として、以下のテーマごとにグループを組んだ。①サークル等の新入生歓迎会（初対面同士の1年生が多く集ま

る場向け）、②1 年生向け少人数演習の初回（初回授業でお互いのことを知るため）、③演習科目の中盤（互いのことは知っている段階で、関係性を強化し発表時に意見交換しやすい雰囲気作りのため）、④その他（自分たちでシチュエーションを考える）。以上 4 つのシチュエーションから、自分が担当したいものを 1 つ決め、そこに集まった人でグループを組んでアイスブレイクを開発するための話し合いを行った。この時間内で完成しなかった場合は、時間外に集まって完成させることとした。

［第 5 回］「ファシリテータとして活躍する」

体験①「アイスブレイクを実践／体験する」

各グループが開発したアイスブレイクを、他のメンバー全員で体験した。生き物をジェスチャーでグループメンバーに伝えるものや、行きたい国や場所を書いて近くの場所を書いた人同士で話し合うもの、「緑と言えば何を連想するか」、「最近買った高いもの」について話し合うもの、「自分がこれから挑戦したいこと」を直接そのワードを使わずに他の人に説明するもの、グループメンバーとの共通点を見つけてそれをレンコンが印刷されたワークシートに書き込むもの、の計 5 種類を全員で体験した。

体験②「アイスブレイクを振り返る」

上の体験中、各アイスブレイクを体験し終わった直後に、付箋紙に「良かった点」と「改善が必要と思われる点」を全員が書いて、当該グループの模造紙に貼り付けた。全てのグループの実践が終わった後、グループごとでそれを読み返して、ワークを更にブラッシュアップした。完成したアイスブレイクは、手順書にまとめられ最終的には F 工房のホームページ上で公開することになっている。

□成果・課題

今年度で 2 回目となる本講座の成果は、以下の 4 点である。

① 最終的なゴールを初回講座の時点で明示できたこと。
この講座のゴールを「オリジナルのアイスブレイクを開発し、それをホームページ上に公開すること」とし、そのために体系的なプログラムを組むことができた。

② ルポルタージュを作成し自分たちの実践を文章にまとめられたこと。
講座で実施したワークを記録する際に、それを広報や振り返りにも活用できる形にまとめられたのは有意義であった。

③ 学生だけでなく教職員も対象にし、実際に職員の参加があったこと。
昨年度は日程の都合で学生しか対象にできなかったが、今年度はその反省点を踏まえ、教職員も対象にした講座として開講できた。結果、2 名の職員（うち、1 名は F 工房スタッフ）が参加した。職員が参加することで、相乗効果が高まるように感じたし、学生も学生だけのノリではなく良い意味での緊張感をもって講座に参加しているようだった。

④ この講座の内容をまとめてポスターセッションで発表できたこと。
参加した職員からの提案で、大学コンソーシアム京都主催「第 20 回 FD フォーラム」

のポスターセッションで本講座の取組み内容と成果を発表することができた。当日は50名を超える方の見学があり、この講座やF工房の取組み自体に強い興味を示して頂けたようだった。（ポスターはp.80参照）

一方で、今年度の課題は、参加者のフェードアウトや欠席者の多さだろう。今年度の参加申込者のうち、今までF工房とのつながりのなかった初めての参加者が8名いた。しかし、そのうち最後まで参加したのは4名だけであった。フェードアウトした理由は直接本人に理由を聞く機会がないためはっきりしないが、参加者の身内感があるのではないかとの指摘があった。つまり、既にF工房とのかかわりがある何名かの参加者たち同士が身内感を醸し出し、初めての人が馴染みにくい雰囲気が醸成されてしまっていたのではないか、という指摘である。

また、全5回にフル参加した者は申込者32名中、たったの4名だった。申込みの条件として、全5回にフル参加することとしていたが、結果的には昨年を下回る参加率の低さだった。本講座は単位も出ず、全回参加者に修了証を発行するわけでもなかったため、仕方のない部分があるのかもしれない。しかし、我々は連続講座として体系的にプログラムを提供しているため、全ての回に参加して欲しかったというのが正直なところである。

次年度に向けては、開催する日時の検討も含めて参加者が連続でも参加しやすい開講日程を整えることが求められる。

□参加者からの声（「受講者アンケート」より抜粋）

【講座に期待していたこと】
・ファシリテーションについての理解を深めるため、改めて考え直してみるため
・ファシリテーションのスキルや基礎を学ぶため
・新たな人との出会い

【講座を受講してみて期待通りの内容だったか】
・自分の知らないことが大半だったし、アイスブレイクという成果も残せた。
・新しい人に出会えた、おもしろい人はいっぱいいる！
・良い意味で期待外れでした。予想以上の学びが得られました。
・第1回しか参加できなかったので、あまり学べた気がしなかったから。

【ファシリテーションについて体系的に学ぶことができたか】
・学術的なところから、いつも扱っていたアイスブレイクを作るまでの流れが美しかった。
・ミニレクチャーの内容がとても体系立っていて、理解しやすかった。主要な文献を紹介して頂けたことで、自分なりに原典を読んで整理していくきっかけを提供してもらった。

【ファシリテータとしてのスキルが身に付いたと思うか】
・プロセスの重視、サスペンションの重要性に気付けたことが、最も大きな学びだった。
・まだまだ学ぶことがいっぱいです。さらに場数を踏まなければならないと思いました。
・アイスブレイクでしか発揮していないような…

【ファシリテータマインドが身に付いたと思うか】
・ジョハリの窓やギブの懸念など、私が普段感じているような不安を具体的に学べた。
・4回目冒頭のジェンダー等の話にはハッとした。
・ギブの4つの懸念など知っていたものが多く、復習にはなったが新しい学びは少なかった。
・元々、ある程度あった気がするのを自覚できたため。

【講座で学んだことを日常で活かしているor活かそうと思っている場面はあるか】
・自分主催のイベント／ゼミ／社会人になったら／部活のミーティング／新人研修／友達との関係／初対面の人との場

【その他、ご要望について】
・ファシリテータマインドを改めて確認できた。無料で受講できたこと、新しいアイスブレイクを知ることができたこと。
・プログラムがしっかり組まれていた。話しやすい雰囲気が作られていた。
・各回の内容と全体を通してのバランスが良かった。流れるように学び、最終的に“何か”を産出するという点が今までと違った。
・ふわふわした内容ではなく、しっかりした内容。もっとカチカチにもできるんでしょうけど、自分にとってはちょうどいい難しさ
・ミニレクチャーとワークが連動して構成されていた点。ミニレクチャーの内容は理解が深まった。合宿が充実していた。
・講義講義している回はやはり眠たくなる。ゲーム性や生産性をつけてはどうか。各回とまでは言わないが、それぞれに何かを作り出す達成感があったら楽しいだろうと思った。
・時間が超過するところがあった。もう少し振り返りの時間が欲しい。

【ファシリテーション Labo.の様子】

—アイスブレイク マスを２１—

—松の浦セミナーハウスにて合宿—

—グループワーク—

2）学内他部門との協働

■各学部

文化学部スターティング・セミナー2014

□テーマ・趣旨

文化学部新入生のネットワークづくりの機会を創出し、新入生の抱える不安を和らげつつ学部教育へのモチベーションを高めるイベント。

□概要

日　時　　4 月 3 日（木）10:00-13:00
場　所　　11 号館各教室
参加者　　セミナー参加者約 230 名（2014 年度文化学部新入生全員）、スタッフ 40 名（教員 7 名、在学生スタッフ 26 名、学生ファシリテータ 5 名、F 工房スタッフ 2 名）

□内容

［事前準備］

事前に担当教員 3 名と打合せを行い、プログラムをデザイン。3 月 27 日（木）、28 日（金）には、在学生アドバイザーと教員を対象とした事前研修会を運営した。

［当日のプログラム］

全体を 7 つのクラスに分け、クラスごとに運営。各クラスには、教員 1 名、在学生スタッフ 3〜4 名、学生ファシリテータ 1 名が配置され、運営を行った。

アイスブレイク「もじりんぐ（F 工房提供）」

「自分を漢字一文字」で表現し、それをペアで紹介し合う。後半は、ペア相手と自分との共通点を漢字一文字で表現しながら、最終的に自分を表す四字熟語を完成させる。

新入生の期待と不安を共有するためのグループワークとフォーラム

グループで「文化研究にまつわる期待と不安を共有するワーク」を体験した後、クラス全体で、大学生活全般にまつわる期待と不安を付箋紙に書き出しクラス全体で共有。最後は、先輩学生や教員からのコメントを交えつつ全体でフォーラムを行った。

［スタッフふりかえり会］

4 月 25 日(金)17:00-18:30 にスタッフ 17 名でふりかえりを行い、アンケート集計結果をもとにセミナーの全体の成果と課題を共有した。

□成果・課題

文化学部と協働を行って今回で 6 年目となる本イベントは、どのクラスにおいても打ち解けた雰囲気が形成され、新入生にとって満足度の高いプログラムが提供できた。このような場が創出される要因として、事前研修を 2 日間に分け、より多くの先輩学生が「もじりんぐ」の内容を事前に理解していたことがあるのではないか、との指摘があった。

一方、担当教員、先輩学生、学生ファシリテータの役割分担をもっと明確にした方が良いのではないかとの指摘や、新入生の質問に答えられるよう様々な経験をした幅広い層の先輩学生に参加してもらう必要性などが、ふりかえり会で議論された。

■その他
フレッシャーズ・コミュニケーション2014

□テーマ・趣旨

新入生 120 名を対象とした 2 日間のプログラムである。本学の教員、在学生、卒業生がアドバイザーとしてサポートする。寝食を共にしながら、交流を深め、大学生活での目標等について話し合う。F 工房は、在学生アドバイザーへの事前ファシリテーション研修、プログラム企画・プログラム実施後のふりかえりのサポートを行った。

□概要

［事前研修］

日　時　　3 月 27 日（木）17:00-19:00
場　所　　万有館　ぷらっとプラザ
参加者　　学生 14 名（在学生アドバイザー）、職員 3 名、F 工房スタッフ 2 名

［当日］

日　時　　4 月 5 日（土）13:00 - 6 日（日）13:30
場　所　　京都産業大学・金閣寺・あうる京北（京都府立ゼミナールハウス）
参加者　　新入生 120 名、学生（在学生アドバイザー）14 名、教員 8 名、職員 15 名、
F 工房スタッフ 2 名（※F 工房スタッフはそれぞれ卒業生、ボランティアとして参加）

［在学生アドバイザーふりかえり］

日　時　　4 月 6 日（日）15:45-16:30
場　所　　神山ホール 3 階セミナー室 2
参加者　　学生（在学生アドバイザー）14 名、職員 7 名、F 工房スタッフ 1 名

□内容

［事前研修］

在学生アドバイザーに向けてファシリテーションの定義や考え方をレクチャーし、当日実施するプログラムを体験しながら、案を詰める作業を行った。

［当日］

金閣寺にてグループ毎にテーマに基づいて写真を撮る「テカピ」を実施。

あうる京北ではペア自己紹介ゲーム、アドバイザーを含めたグループに分かれ、大学生活や社会人生活等について話すクラス内トークを実施した。

［在学生アドバイザーふりかえり］

運営についての課題や成果学びについてグループ毎に話し合い、全体共有を行った。

□成果・課題

様々な立場の人が話し合う場を「仕組みとしてどう創るか」について、在学生アドバイザーがファシリテーションの視点を交えながら考え、実際に運営することで、どの立場の人でも参加し易い、また、多様な意見を交換しあえる場を創出できたのではないかと考える。

WACE第19回世界大会 学生参画企画

□テーマ・趣旨

2015 年 8 月に本学で行われる WACE 世界大会において、学生参画企画部門が立ち上がった。本番にむけて教職員・有志の学生が協働するにあたり、第 1 回企画ミーティングは、顔合わせ・今後の企画イメージを掴む目的で開催された。F 工房は教職員と共にアイスブレイク、グループワークの企画・運営を行った。

《第1回企画ミーティング》

□概要

日　時　　1 月 20 日（火）16:15-18:15
場　所　　雄飛館ラーニングコモンズ 2 階パフォーミングスペース
参加者　　学生 45 名、教員 5 名、職員 3 名、F 工房スタッフ 1 名

□内容

アイスブレイク

男女比を考慮した上でナンバリング（作りたいグループ数分の番号を振ること）を行い 4～6 人グループを作った。グループごとに椅子に座り輪になり、口頭で簡単に自己紹介を行った。（学部・学年・最近ワクワクしたこと・この企画に参加しようと思った理由）

グループワーク

学生企画の 3 つのミッションである「総合サポート」「日本文化を紹介する」「京都産業大学を紹介する」について各グループが案を出し合うワークを行った。グループ毎に各テーマが掲げられているブースに行き、模造紙と付箋を使い、10 分間アイデア出し、5 分間まとめ作業を行った後、次のブースに移動する。前のグループが残したアイデアを参考にしながらさらに案を練る作業を行った。教員や職員は、テーマについての説明や例を示すなどサポートを行った。後に、全ての模造紙を貼りだし、催し終了後に回遊できるようにセッティングを行った。

□成果・課題

短い時間の中で、45 人のメンバーがそれぞれのセッションに触れられたこと、またサポーターである各教職員が同じ思いのもと一緒に考えるフラットな雰囲気が今後の企画作業にいい影響を与えると感じた。教職員・学生が協働するにあたり、打ち合わせの段階から企画内容・運営方法などそれぞれの担う役割を活かしあえていた。立場を超えて、1 つの企画の成功という共通認識が最大の要因ではないかと考える。今後、様々な場における協働が行われる際の模範となる有意義な場であった。

今回のワークでは、テーマについて考えるヒントシート、ブレーンストーミングの方法シートを配布した。実際にそれぞれのグループが必要に応じて活用をしていたように窺える。ラーニングコモンズにおいて多くの人数が集い、運営説明が届かない範囲で、グループに分かれてワークをする場合は、どのグループも同じように進められるよう、ワークの進め方を明記したシートを配布することが重要であると考えた。

３）授業の支援

■キャリア形成支援教育科目

キャリア・Re-デザインⅠ

《授業運営》

□授業の趣旨（シラバスより引用要約）

大学の勉学に対して意欲の低い状態にあり、結果として低単位の状態におかれている学生、もしくは、大学から職業世界への移行に関して困難を抱える学生を主な対象とした科目。〈自己開示〉→〈自己概念の確立〉→〈社会への目線づくり〉→〈キャリア意識の再構築〉というプロセスをたどることで、受講生のモチベーションの再発見とキャリア形成を支援する。

□概要

日　時　　［春学期・秋学期共通］不定期水曜日 3-4 限連続授業および 1 泊 2 日の合宿授業
場　所　　［春学期・秋学期共通］
〈初回授業〉5 号館 5303 教室他
〈通常授業〉5 号館 2 階、3 階　各演習室
〈合宿授業〉あうる京北（京都府立ゼミナールハウス）
参加者　　［春学期］受講生 89 名、ファシリテータ 17 名（教員 6 名、事務職員 1 名、学外関係者 5 名、学生 3 名、F 工房スタッフ 2 名）
［秋学期］受講生 133 名、ファシリテータ 18 名（教員 5 名、事務職員 1 名、学外関係者 4 名、学生 5 名、F 工房スタッフ 2 名）

□授業運営

第 1 回（オリエンテーション、全体授業）

「アートコミュニケーション」と「自分史を語る」という、2 つのワークショップを実施。グループでの協働体験や自己開示など、本科目での肝となるワークを体験した後に、履修を希望する学生のみ手続きを行う。

第 2 回（クラス授業）

クラスでの初顔合わせ。アイスブレイクを中心に行いながら、クラスが自らの居場所となるよう受講生どうし、受講生とファシリテータの関係を構築する。

第 3 回（合宿授業）

非日常の時空間において、短期集中的にチームビルディングを推し進めつつ、自己認識作業を行う。また、そのプロセスで巻き起こる「対話（価値観の衝突や摺り合わせを伴うコミュニケーション）」を通じて、受講生の有能感を醸成しつつ、さらなる関係性の深化も図る。合宿 2 日目は、第 4 回で実施する「社会人インタビュー」の準備をしながら、社会へ目線を向ける作業を行う。

第 4 回（クラス授業）

「社会人インタビュー」の実施。グループごとに 2 人の社会人（今までキャリアチェンジを行ってきた人を中心に招聘）へインタビューをし、仕事世界で働く他者と対話をする。

第5回（クラス授業）

「社会人インタビュー」を個人・グループで振り返りながら、そこでの学びを個人に落とし込む。そして、自らの課題を整理しつつアクションプランを作成する。

第6回（クラス授業）

クラスメンバーに向けた「5 分間スピーチ」を実施。自ら作成したアクションプランを発表することで、自己/他者とのより深い対話を実践する。スピーチ後は、メンバー全員がスピーカーに対するフィードバックコメントを書き、最後にそれを交換し合うセレモニーを行って授業を締めくくる。

□成果・課題

開講から丸9年を迎えた本科目は、今年度もファシリテーションの考えに基づく支援型教育の充実を図り、学生のモチベーションの再発見を支援した。これまで計18期の総受講生数は1,785名となり、毎学期約100名の学生が受講する形が継続されている。

今学期の大きな成果は、授業の取組みを発信することができた点である。昨年度に引き続き、学内紀要に論文を掲載することができた他、京都ジョブパークが企画したシンポジウム（p.52参照）で本科目の取組みを発表し大きなインパクトを残した。同時に、今後も本科目のユニークな点（低単位の学生層を対象としている点、支援型教育を徹底している点）を外部に発信し続ける必要性を感じた。今後も、定性的、定量的の両面で学生の変化を捉え、外部に発信していくことが求められる。

《職員ファシリテータ研修》

□概要

日　時　　［春学期］4月21日（月）10:30-12:00
　　［秋学期］授業に参画した職員ファシリテータが春学期と同一のため実施せず
場　所　　F工房　道具箱
参加者　　［春学期］本学事務職員1名

□内容

ファシリテーションの歴史や理論的背景をK. Lewinなどを用いながら紹介。また、「キャリア・Re-デザインⅠ」科目で職員ファシリテータとして活動する際に必要となる科目の知識（歴史や背景、受講生像）を提示した後、実際の活動内容を説明した。

□成果・課題

本科目で蓄積してきたファシリテーションの知見や受講生像を新規担当者と共有することができた。それにより、当該職員にファシリテータとして活動するレディネスが形成された。

キャリア・Re-デザインⅡ

《授業運営》

□授業の趣旨（シラバスより引用要約）

「キャリア・Re-デザインⅠ」での学びを深化させ、言語を中心とした自己表現という枠組みの中で、他者との対話（価値観を問われるような、肝心な話をすること）と自分との対話（他者との対話を通して自らの価値観を整理すること）を繰り返し行うことで、個としての自己を活性化し、自らの力で他者との関係を築きつつ自立した大学／社会生活を営むことができるようになることを支援する科目。

□概要

日　時　　［春学期］水曜日 3-4 限連続授業（3 回）および 1 泊 2 日の合宿授業（2 回）
　　［秋学期］受講生が規定数に満たず不開講
場　所　　［春学期］
〈通常授業〉5 号館 5221 演習室
〈合宿授業〉（その 1）神山研修室棟、（その 2）松の浦セミナーハウス
参加者　　［春学期］受講生 8 名、ファシリテータ 2 名（教員 1 名、F 工房スタッフ 1 名）

□授業運営

第 1 回（オリエンテーション、教室授業）

オリエンテーションとアイスブレイク。「キャリア・Re-デザインⅠ」での学びを振り返り、ラジオドラマ作成のためのコンセプト（140 字）に落とし込む。

第 2 回（合宿授業その 1）

ラジオドラマ①を作成。400 字のプロットを作成した上で、ドラマのスクリプトを執筆。それを作成者以外が演じて録音する。

第 3 回（教室授業）

ラジオドラマ①のふりかえり。合宿で作成したラジオドラマを聞き、全員で合評会を実施。自己および他者との対話の深化を図る。

第 4 回（合宿授業その 2）

ラジオドラマ②の作成。「将来の自分の転機」をテーマに、各自がコンセプト、プロット、スクリプトを作成。作成過程で対話セッションを入れ、互いの作品を吟味し合う。

第 5 回（教室授業）

ラジオドラマ②のふりかえり。合宿で作成したラジオドラマを録音。その後、合評会を実施し、将来に対する受講生の価値観を共有する。

補講授業

第 5 回の続き。合評会の続きを行いながら受講生が本科目で学んだことを言語化する。

□成果・課題

今年度、初めて開講した本科目は「ラジオドラマの脚本」を作成することを通して、自己および他者との対話を促進するプログラムを実施した。詳細は第 2 部（p.62）を参照。

自己発見と大学生活

《授業運営》

□授業の趣旨

本科目は、春学期、1 年次生を対象に開講している初年次向けキャリア形成支援教育科目である。今年度は、1 クラス 82～120 名のクラスを 24 クラス設け、合計 2,175 名の新入生が受講した。

授業は、大学入学という「大きな節目」に「大学生活をどのように過ごせばいいのか？」「大学での学びをどうしたらいいのか？」「自分は、将来、何をしたいのか？」といったなかなか答えが見つからないことを受講生同士、担当教員・キャリファシ（後述）とともに考えながら、将来に向けての一歩を踏み出すきっかけをつくることを目的としている。（2014 年度シラバスより引用）。自立的な大学生活を営むために、「キャリア」の視点から自己と他者、そして大学生活や社会という環境を視野におきながら、自分自身について考え、マップ作りを行う科目である。同時に、受講生にとって「京都産業大学がホームグラウンド（居場所）となる」ことも目指している。ゆえに、安心して大学での活動ができるようなマインドセットが形成されることを本科目では支援している。

□概要

日　時　　［春学期］毎週火曜・木曜・金曜 1、5 限、月曜 1、2、5 限、水曜 1～3 限（同一時限に各 2 クラス開講）

場　所　　5 号館 5301、5302、5405、5406、5407 の各教室

参加者　　［春学期］受講生 2,175 名、教員 23 名、キャリア科目担当学生ファシリテータ（キャリファシ）54 名

□授業運営

本科目では、授業の教案集である「ティーチング・ガイドブック」をもとに、全クラス同一コンテンツにて授業運営を行っている。各回の授業内容は以下の通り。

第 1 回　オリエンテーション　―目的、進め方、ルール等を学生、教員で共有―
第 2 回　はじめの一歩を踏み出そう　―できるだけ多くの人と話してみる―
第 3 回　自分の行動について知る　―信頼される人を目指して―
第 4 回　大学生活にリアリティを持つ　―これまでの大学生活を振り返る―
第 5 回　大学生活について考える　―大学生活を充実させるって何？―
第 6 回　「自己発見レポート」から考える自分　―今の自分の立ち位置を知る―
第 7 回　他者を通して知る自分　―第一印象ワーク＆価値観ランキング―
第 8 回　「キャリア・インタビュー」発表　―大人から学ぶキャリア・デザイン―
第 9 回　社会人の体験談　―どのようなキャリアをデザインしているのか―
第 10 回　私たちの考える大学生活　―グループ発表準備①―
第 11 回　私たちの考える大学生活　―グループ発表準備②―
第 12 回　私たちの考える大学生活　―グループ発表準備③―
第 13 回　クラス発表会　―グループでの成果を発表―

第 14 回　授業での学びを振り返る　―何を学びどう活かすのか―
第 15 回　チャレンジシート「私の大学生活」発表　―どのような大学生活を送るか―
上記以外に、全体会として 7 月 5 日（土）、7 月 12 日（土）午後に「合同発表会」を実施。

□成果・課題

今年度は、第 3 回・4 回の授業コンテンツの変更を行ったが、授業全 15 回で目指す目標と、目標に到達するためのステップである各回授業の目標がどう関連しているのかについて、担当教員より多く問い合わせがあった。2015 年度は、これらの意見も踏まえた上で、授業全体としての目標と、各回の関連性について慎重に検討しながら授業設計を行う予定である。なお、今年度の成果として、各クラスの様子を教職員で共有し合う、ランチタイムミーティングが行われたことが挙げられる。週に 1 度、任意で集まり授業内容や、学生・キャリファシの様子についてさまざまな情報共有・意見交換が行われた。また、全担当教員に情報共有できるよう、毎回ニューズレターを作成し、メールにて共有していた。先述の授業内容についても、この場で共有された。複数の教員で運営が展開される授業において、直接、気さくに対話・意見交換をする場、またそれを全体に共有する仕組みを作ることは、信頼関係の構築や、より良い授業づくりにおいて重要であると考える。2015 年度も引き続き実施することとする。

《キャリファシ活動支援》

□概要

日　時　［キャリファシの集い］
第 1 回～全クラス共有編～ 4 月 30 日（水）15:00-17:00
第 2 回～授業内容伝授編～5 月 12 日（月）、13 日（火）、15 日（木）、16 日（金）3 限、4 限（13 日と 16 日は 4 限のみ）
第 3 回～全クラス共有編～ 5 月 21 日（水）15:00-17:00
第 4 回～全クラス共有編～ 6 月 9 日（月）3-4 限
［キャリファシふりかえりの集い］
8 月 7 日（木）、8 日（金）各日 10:00-17:00

場　所　［キャリファシの集い］1 号館学びのスペース B（4 月 30 日のみ）、F 工房　作業場
［キャリファシふりかえりの集い］5 号館ミーティングルーム 1、2

参加者　［キャリファシの集い］のべ 38 名、教職員 6 名
［キャリファシふりかえりの集い］のべ 80 名、教職員 7 名

※別途　授業開始前に研修を 3 回実施。
［ファーストミーティング］2 月 20 日（水）
［キャリファシ研修合宿］3 月 5 日（水）、6 日（木）
［キャリファシ直前研修会］3 月 26 日（水）

□内容

キャリファシとは「キャリア科目担当学生ファシリテータ」の略称で、本学キャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」において、先輩として授業をサポートする学生の

ことを言う（無償の活動である）。各クラスに2〜4名ほど配置する。受講生をサポートするために、授業でのアイスブレイクの実施や、グループワークの支援、プリントの配布、記録撮影、教室空調・照明管理、教員との連携（役割分担や、学生の様子の報告、授業内容の打合せ、実施後のふりかえり）が主な活動である。加えて、1 人の先輩学生としてモデル的な役割も間接的に担っている。

今年度は、公募で集まった54名の学生が同活動に参加した。

F 工房は、キャリファシ活動の支援として、授業開始前に3度の研修、授業期間中は、各クラスの打合せやふりかえりに適宜参加するとともに、クラス横断型「キャリファシの集い」を行った。そして、授業終了後には、活動を通しての各自の学びをふりかえり、話し合う「キャリファシふりかえりの集い」を行った。

事前研修においては、実際にキャリファシが運営する授業内容の体験や、説明する際の話し方のポイントについてのレクチャーや実践、ファシリテータとしての観察するスキル、グループ支援に入る際の話し方についての検討、ふりかえりの方法など、授業サポートに入るにあたって必要とされるスキルや考え方について、体験を交えて学んだ。

授業開始後については、各クラスで起こるそれぞれの事例をその都度話し合い、集いにおいても情報共有を行った。

□成果・課題

キャリファシの人数は32名（昨年度）から54名（今年度）となり、より多様なモチベーション・個性を持ったメンバーが集まった。クラスにおいてはそれぞれの持ち味を活かし合いながら、教員と連携し、運営やグループワークのサポートを行っていた。受講生数も各クラス82名〜120名と多いため、様々な個性のキャリファシがいることで、多様な受講生それぞれにとって話しやすいキャリファシが存在していた。また、「色んな先輩がいるんだな〜。」と、受講生が直接的に多様性や幅広いキャリア（生き方）を実感する教育的な機会になったのではないかと推察する。

キャリファシ同士の関係性は、昨年度と類似した課題で、キャリファシそれぞれが様々な課外活動を行っているため、キャリファシ同時の連携の仕方に差が見られたことである。毎回教員を交えて打合せやふりかえりを行うクラス、ふりかえりの時間だけでも確保しようと集まるクラス、授業当日に打合せを行うクラスなどである。モチベーションや個人の活動など多様な要因が考えられる。F 工房スタッフは、それぞれのクラスや個人が抱える悩みについてふりかえり等においてヒアリングし、クラス横断型の集い時に共有や意見交換の場を設けることに注力した。2013年度よりも、多くのキャリファシが話し合う場を創出することはできた。しかし、人数の多さゆえ、そもそも集いに参加できないメンバーもいた等、キャリファシ全体をサポートすることに困難を感じていた。2015年度はF工房が担っていた集いをキャリファシに任せるなど、よりキャリファシがキャリファシをサポートする場を創る仕組みを設けることで、キャリファシ自身の成長の機会を増やすと共に、F工房が抱えていた困難の解決に挑むこととする。

その他キャリア関連科目でのワークショップ運営など

《大学生活と進路選択》

□授業の趣旨

2 年次生を対象としたキャリア形成支援教育科目。自分自身と将来を考え、大学 2 年生だからこそ身に付けておくべきこと、考えておくべきことを取り上げる科目。

本科目において F 工房は、5 回目の授業を担当しコミュニケーションを体験するプログラムの企画と進行を行った。担当したクラスは開講されている 6 クラス全て。

□概要

日　時　　［春学期］ 5 月 8 日（木）3 限、4 限、9 日（金）3 限
　　［秋学期］10 月 20 日（月）3 限、10 月 23 日（木）2 限、4 限
場　所　　［春学期］5 号館 5301、5302 教室（5 月 8 日）、12 号館 12502 教室（5 月 9 日）
　　［秋学期］12 号館 12502 教室（10 月 20 日）、5 号館 5405、5301 教室（10 月 23 日）
参加者　　受講生のべ 479 名、学生ファシリテータのべ 6 名

□運営内容

「F 工房流：コミュニケーション・トレーニング」を以下の通り実施。担当する教員の要望に応じてクラスごとにアレンジはしているものの、全クラスとも同一の内容で実施した。なお、クラスによっては F 工房スタッフと学生ファシリテータとが協働で授業運営を行った。

［目的］

- ✧ 特別に設計されたコミュニケーション実習を通して、自分のコミュニケーションスタイルを見つめなおす。
- ✧ 互いの価値観や考え方の違いを前提とした様々なコミュニケーションのあり方について、体験を通して考える。

［進め方］

- ➢ ワークはペアワークを基本とし、ペア相手はワークごとに変える。
- ➢ 各ワークでは、ペア相手とのコミュニケーションに「特別な条件」を付したものを提示し、その条件のもとでコミュニケーションを図る。
- ➢ 「特別な条件」は、ワークを実施する直前にその都度発表する。
- ➢ 「体験」と「ふりかえり」のサンドウィッチ方式で進行し、体験した直後にその時の自身の気持ちを振り返り、ペア相手と共有する。

［プログラム］

<u>個人ワーク「どっちの選択肢 11」</u>

「将来住むなら…A 都会、B 田舎」、「今欲しいのは…A 現金 10 万円、B 自由な時間 10

日間」など、2 択で答えられる質問を 11 問用意。それらを個人で記入する時間。後ほど、このワークシートを使用してペアワークを進めていくことになる。質問項目は、事前に学生ファシリテータと相談して、できるだけ半々に分かれやすいものを選んだ。

ペアワーク①「聞き方編」

ペアで話をする際、聞き手側に「特別な条件」を付すワーク。条件は、1 回目「携帯電話を触りながら話を聞く」、2 回目「相手の目を凝視して聞く」、3 回目「特定の言葉だけ使って反応を返しながら相手の話を聞く（特定の言葉 :「デ」、「ポ」、「タパ」、「コン」、「オケ」、「ジャカルタ」から 1 つ選んで使用）」の 3 つとし、同じ条件の際に話し手と聞き手を入れ替えて、両者とも同じ体験をすることとした。なお、話し手は「自己紹介」、「休日の過ごし方」、「自分のオススメを語ろう」の 3 つの条件で話すようにした。

ペアワーク②「伝える編」

「どっちの選択肢 11」のワークシートからペア相手と違う答えを選択しているものを 1 つ選び、その内容について相手に伝えるワーク。その際、「結論→理由→結論」の流れを意識し「私は〇〇を選びました。なぜなら……だからと考えたからです。ですので、私は〇〇を選んだのです」という型を意識して相手に伝えるようにした。

ペアワーク③「質問する編」

ワークシートから互いに違う答えを選んでいる選択肢を 1 つ選ぶ。1 回目は「クローズド・クエスチョン（Yes／No で答えられる質問）」だけで相手がなぜその選択肢を選んだのかを聞き出す。2 回目は「オープン・クエスチョン（Yes／No で答えられない質問）」だけを使って同様の理由を聞き出すワーク。

ペアワーク④「討論編」

ワークシートから互いに違う答えを選んでいる選択肢を 1 つ選ぶ。それまでのセッションで気づいたことを意識しつつ、相手を説得することを試みるワーク。自分の意見の方が正しいという前提に立ちつつ、相手が自分の意見に寝返るくらいまで、自分の意見の正当性を主張する話し合いを実践する。

ペアワーク⑤「対話編」

ワークシートから互いに違う答えを選んでいる選択肢を 1 つ選ぶ。それまでのセッションで気づいたことを意識しつつ、自分と相手の意見の違いを互いに認め合う形の話し合いを行うワーク。なぜ相手はその答えなのか、なぜ自分とは違うのか、相手の考えや思っていることをどんどん掘り下げることを試みるワーク。

まとめ「討論と対話の違い」

最後に、今日感じたことを個人で書いてまとめる。その後、F 工房スタッフが「討論と対話の違い」についてミニレクチャーを行い、本日のまとめとした。

□成果・課題

今年度は、昨年度実践したものを改訂しワークを行った。特に、「どっちの選択肢 11」の内容と進行用のスライドをブラッシュアップした。また、全クラス同一の内容になったことで、F 工房が提供する「コミュニケーション・トレーニング」を一つのパッケージとして提供することができた。

また、授業を運営する際に、学生ファシリテータとの十分な協働ができた。学生に丸投げするのではなく、F 工房スタッフと学生ファシリテータとが役割分担しながらワークを進行した点が特長と言えよう。

また、いくつかのクラスでは、前に誰も立たない形でワークを運営するという新たな試みを実践した。つまり、前方スクリーンに投影されるスライドとマイクを通して教室中に響く声だけを頼りに、受講生がワークを体験するという方法である。進行役は教室の一番後ろにおり、遠隔操作によってスライドを進め、教室の様子を後方から観察しながらマイクを通して指示を出した。ただ、最後のまとめ講義の際は、運営者が前に立って説明を行った。この取組みの目的は、①横に座っているペア相手とのコミュニケーションに集中してもらうため、②普段の授業ではあり得ない形を作り、自らと教員との授業中のコミュニケーションのあり方を相対化するため、③ワークを体験する際には前に誰も立たず、講義をする時にだけ前に立つことで、授業内にメリハリを効かすため、である。

新たな試みとなったこの運営方法について、受講生からは、「先生が前にいると『やらなきゃいけない』と思うけど、いないと自分から『やろう！』という気持ちになれる」や「先生からの変なプレッシャーがなくて良い」、「隣に座っている人に集中できる」というポジティブな意見が多かった。また「普段と変わらない」、「特に気にならなかった」という意見も多かった。一方で、「戸惑った」、「常に話している人を探してしまった」という意見も見られたが、こちらは少数派だった。

今後、この運営方法を発展させ、参加者がより主体的に取り組める工夫を探究していきたい。

■学部専門科目
法学部演習（久保先生）

□授業の趣旨

裁判外紛争処理を扱う演習科目の第2回授業において、「コミュニケーション・トレーニング」のワークを実施。「高感度なアンテナを張って、有意義な情報をたくさんキャッチしよう！」を合言葉に、ワーク体験を通して、気づく力を高め、どん欲に学び取る姿勢を身に付けることを目的に実施した。

□概要

日　時　　4月18日（金）4限
場　所　　4号館4G演習室
参加者　　受講生26名（3年次と2年次の混合演習）

□授業運営

グループ分け、アイスブレイク

会話せずに、与えられた条件を満たすグループをつくる。条件は「グループ人数を均等、男女比と久保ゼミ経験比と学年比がバランスよくなる」グループを作る。その後、グループ内で自己紹介。

グループワーク①「発話 de 伝言」

「顔文字」の配置を同じグループメンバーに口頭でのみ伝え、メンバーが正しい顔文字を書くことを目指すワーク。記号を組み合わせた顔文字をどうやって他者に伝えるか、という体験を通じて、普段のコミュニケーションのあり方について考える。

グループワーク②「ほげげ語ゲーム」

文化学部元教員とF工房が共同で開発した「〈言語ゲーム〉ゲーム『ほげげ語ゲーム』」を実施。本来は、ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」概念を学ぶために開発されたものだが、今回はそれを応用し、他者の様子を観察して様々な情報をキャッチする力を身に付けることを目的に実施した。ワークは、「ほげげ語」という架空の言語を操る2人のメンバーのやり取りを見ながら、グループの他のメンバーが「ほげげ語」の辞書を完成させることを目指すものである。

□成果・課題

教員から依頼された目的に沿ってプログラムを組み立て実施できた。第2回の授業だったため、アイスブレイクの要素も含めていたが、「ほげげ語ゲーム」ではグループで協力すること、「ほげげ人」というフィクションの役割を演じることを通して、リラックスした雰囲気が醸成された。今回のような「コミュニケーション・トレーニング」に関するプログラムは、今後パッケージ化を行い様々な場で応用できるようにしたい。

法学部演習（耳野先生）

□授業の趣旨

担当教員の4年次ゼミ生が行政とコラボレーションして企画した「公共交通機関利用促進について考えるワークショップ」イベントに、2・3年次ゼミ生もファシリテータとして参加できるようになるため、演習科目でファシリテーション研修を実施。授業の2コマ分を使って、アイスブレイクやグループワーク体験を行いながら、グループで話し合いを進めるためのポイントやファシリテーションの基礎、ファシリテータとして重要な心構えなどを紹介した。

□概要

日　時　　4月25日（金）3限、5月2日（金）3限
場　所　　4号館4F演習室
参加者　　受講生24名

□授業運営

［4月25日］

導入・アイスブレイク体験

冒頭、研修の目的とF工房の紹介をした後、全員で円になって行うアイスブレイク「サークルコレクション」を実施。演習授業が始まってまだ3回目だったこともあり、互いを知り合うことを目的に運営。

ミニレクチャー「ファシリテーションについて」

ファシリテーションの定義や効果、ファシリテータのスタンスや役割について、例を出しながら簡単に説明。

グループワーク「How do you feel about KSU？」

グループワークを体験するため、「KSU（京都産業大学）について感じていること」を付箋紙に書き出して共有するワーク。付箋紙は3色使用し、青：良い点、赤：良くない点、黄：その他、として出し合い模造紙上で共有した。また、ワークを通して、ブレーンストーミングやカテゴライズなど、意見出しや集約の方法について紹介した。

［5月2日］

導入・前回のふりかえり

本日の目的と進め方を確認した後、前回のグループワークの振り返りシートを返却し、その内容をグループ内で共有。

ミニレクチャー「ファシリテータとは」

前回の研修を踏まえ、アイスブレイクの重要性、場をデザインする際のポイント、グループ活動を促進する人の意義について説明。

グループワーク「公共交通機関について考える」

新しいグループに組み直して、ワークショップ当日のテーマである「公共交通機関」について考えるグループワークを実施。グループ内でファシリテータ（進行役）を決めた上で、「公共交通機関を利用する理由」と「もっとこんなことがあれば公共交通機関を利用するのに…」という2つの問いについてグループで話し合った。このグループワークは、ワークショップ当日のシミュレーションの一環として実施。自分の意見を言語化し、いろんな人の意見を知ることで、少しだけ余裕をもって当日を迎えるようになることを意図した。

グループワーク後は、このワークのコンテンツ（公共交通機関について）とプロセス（ファシリテータがいる話し合いの場の感想について）の両面について、個人で振り返りシートを書き、それをグループで共有して終了とした。

□成果・課題

学部の演習科目内で本格的なファシリテーション研修を実施するのは初めての事例だったが、2 週間連続で時間を取って頂いたため、体験とミニレクチャーを織り交ぜながらじっくりと取り組む場をつくることができた。また、今回は「イベントのグループワークでファシリテータとして活躍する」という明確なゴールがあったので、受講生もリアリティを持ちつつ取り組むことができたのではないかと振り返る。

担当教員からは、「イベント当日のゼミ生は、非常に落ち着いて取り組んでおり、行政や企業の方に臆することなく、活発に発言していました。」とのコメントを頂いた。

また、研修を実施したのが授業の初期段階だったため、「研修自体がゼミ生にとってのアイスブレイクになっていた。その後のゼミ活動では、ディスカッションやディベートなどのグループ活動を取り入れながら進めているが、ゼミ生は積極的に意見を出し合ったり、熱心に人の話に耳を傾けたりと、非常に活発なゼミ活動が行えている」とのフィードバックも頂戴した。

今回の実践で、「ゼミ活動を活性化するためのファシリテーション研修」パッケージの必要性を感じることができた。次年度以降の課題としたい。

文化学部：アジア文化基礎演習2（久米先生）

□授業の趣旨

中国文化に関する調査・発表を行ないながら、文章作法やレポート作成方法について学ぶ基礎演習科目。情報カードゲームを用いて、お互いにコミュニケーションを発信・受信することの体験を通じ、その後の授業の中でも発信・受信（聴く、質問する）を意識するきっかけをつかむことを目的とした。

□概要

日　時　［春学期］ 6月5日（木）4限
　　［秋学期］11月6日（木）4限
場　所　［春学期］11号館11307教室
　　［秋学期］11号館11309演習室
参加者　［春学期］受講生12名、学生ファシリテータ1名
　　［秋学期］受講生11名、学生ファシリテータ2名

□授業運営

［6月5日］

情報共有ゲーム「バスは待ってくれない」

5～6人グループに分かれ、各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布。全員で1つの課題（地図を完成させること）クリアを目指した。

［11月6日］

情報共有ゲーム「顔文字ミュージアム」

F工房スタッフと学生ファシリテータで開発したアクティビティ。5～6人グループに分かれ、各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布。全員で1つの課題（正解となる顔文字を当てる）クリアを目指した。

□成果・課題

ワーク後のふりかえりにて自分のコミュニケーションスタイルを認知することに重点をおくプログラム展開を行った。

春学期は、メンバーの話を聞いて情報を引き出すこと、メンバーそれぞれの役割を認識し、お互いにフィードバックすることを行い、秋学期は発言しやすい環境作りができていたか、また情報を発信できていたかについてふりかえった。ふりかえりシートには秋学期の方がお互いに意見を聞きやすい・発言しやすい環境が出来ていたと記載している学生が多かった。秋学期に入り関係性がより親密になった事も要因の一つであると考えるが、コミュニケーションの方法に着眼できる同類のワークを複数回行うことは各自の変化を実感することに有効的であると考えた。今後はワークにて意識化したコミュニケーションスタイルを普段の演習にてどのように横展開しているかを詳しく確認する方法を探るとともに、横展開をより意識できるようなワーク作り行う必要があると考える。

ゼミ間交流：荻野ゼミ（コンピュータ理工学部）×宮澤ゼミ（外国語学部）

□授業の趣旨

コンピュータ理工学部4年次ゼミ（荻野先生）と外国語学部4年次ゼミ（宮澤先生）による合同卒業研究発表・交流会が行われた。F工房は、研究発表が行われる前に、初対面同士の緊張した雰囲気をほぐし、コミュニケーションの促進を図るためにアイスブレイクを行った。また学生ファシリテータとともにその後の研究発表会に参加し、質問や意見交換を行った。

□概要

日　時　　1月14日（水）4-5限
場　所　　11号館14106セミナー室
参加者　　受講生19名、教員2名、学生ファシリテータ2名、F工房スタッフ1名

□授業運営

アイスブレイク（フリップ自己紹介）

A4用紙を4分割し、順番に学部・学年・名前、マイブーム、本日の見どころ（発表者）・今の気分（参加者）を記入。それぞれ立ち上がり、なるべく話したことがない人とペアを組み、フリップの内容について順番に紹介し合う。1ペア2分ほどで行い、どんどんペアを組み替えなるべく多くの人と対話することを目標とした。

□成果・課題

当日は4回生以外にも、下回生の後輩や、ゼミを選んでいる最中の見学者もワークに参加した。アイスブレイクを通して、お互いの所属や属性がわかり、学年・学部を超えて交流しやすくなったと考える。発表時の雰囲気も、発表者自身の緊張感がほぐれていたとともに、聴講者の聴く姿勢や反応（笑いや質問等）が良かったと感じる。また、学生ファシリテータに加え、担当教員である荻野先生・宮澤先生がアイスブレイクに参加されたことでより場の一体感が増した。

発表では、それぞれが当たり前のように使っている用語や持っている考え方も、質問をし合うことで改めて考えなおすきっかけになったのではないかと推察する。発表形態や、質問・意見交換、様々なプロセスがお互いの勉学への刺激になっていたと窺える。

理系（感性工学）と文系（アメリカ文学）一見ジャンルが全く違うようにみえるが、発表や質問をしあう中で、「人をよく観察することで、創造・発展していく分野」という共通点が発見された。話しやすい雰囲気をつくり、お互いに意見を積極的に交わすことで新たな学びや発見が生まれる。学部・分野を超えたコラボレーションは、教員・職員・学生、参加者全員にとって大きな学びの刺激になると、今回のコラボレーションゼミに参加する中で感じた。

1拠点のキャンパスを活かす大いなる可能性を秘めた合同ゼミ、今後はそのきっかけづくりや、学生ファシリテータによる支援を、様々な学部の先生方と行うことを目指していきたい。

法教育演習Ⅰ

□授業の趣旨

法学部が開講している初年次演習科目「プレップセミナー」に、次年度 SA（スチューデント・アシスタント）として科目をサポートする学生を対象とした科目。課題解決型のグループワーク・リサーチを通じて、大学における法学学習の準備を整えるために必要な事柄は何か、最初歩として学ぶべき内容は何かを理解するとともに、初学者の意欲を高め分かりやすい教え方、初学者と教員の橋渡しとなり得るファシリテータとしてのスキルや教員との協働のあり方を学ぶ科目。

F 工房は授業の第 13 回～第 15 回を担当し、SA 活動に内包される 2 つのポイントをファシリテーションの視点から学ぶことを目的として授業を行った。2 つのポイントとは、1）プレップセミナーのクラス内に何でも言い合えるリラックスした雰囲気をつくり、学びに専念できる環境を生み出す、2）ポジティブ・フィードバックを通して、受講生の有能感を育み、授業に対する意欲向上を支援する、である。なお、上記の目的は、担当教員との事前打合せの際に昨年の課題や今年度の SA 活動の様子を共有した上で決定した。

□概要

日　時　　12 月 26 日（金）、1 月 9 日（金）、1 月 16 日（金）3 限
場　所　　4 号館 4H 演習室
参加者　　受講生 12　名、担当教員 3 名

□授業運営

［第 13 回授業（12/26）【アイスブレイクを理解する】］

オリエンテーション

F 工房とスタッフの紹介、本日の進め方とルールの説明。

アイスブレイク「サークルコレクション」

担当教員も含めた全員で円になり、身体を動かしながら交流を深めるいくつかのアイスブレイクを実施。

ミニレクチャー「アイスブレイクの意義」

個人が小集団を通じて成長するために必要な「Unfreezing」のプロセスとグループ活動を阻害する「自己防衛」の 2 つの観点から、アイスブレイクを行う意義を説明。

グループワーク「アイスブレイクが求められる場面を考える」

授業の場を思い出し、自分が「〈アイス〉を感じる場面」と「〈アイスがブレイクされた〉と感じる場面」について付箋紙の色を分けて意見を出し合う。その後、「そのアイスをブレイクするための具体的な方法」について別の色の付箋紙を使って書き出す。

その際、（アイスブレイクのワーク等）プログラムとしてアイスをブレイクするのか、それともプログラム以外のやり取り（挨拶、雑談、個別の話しかけ等）で、そのアイスをブレイクするのか、どちらが可能（「どちらも可能」も含む）かを考え、クラス全体で共有して終了。

［第 13 回授業（1/9）【観察とポジティブ・フィードバックを意識する】］

導入、前回のふりかえり

前回のグループになって、アイスブレイクのワークの続き。プレップセミナー内でアイスブレイクを実現するための方法をプログラムと非プログラムの両面から再び考えた。

アイスブレイク「褒め達人」

グループをシャッフルして、新たな 4 人グループを編成。そして、同じグループメンバーに対する褒め言葉を付箋紙に書いて、本人に渡す。本人がそれらを堪能した後、グループ全員分の褒め言葉をミックスして種類ごとにカテゴライズ。

ミニレクチャー「フィードバックする際のポイント」

ファシリテータとしてフィードバックする際に、最低限気をつけたい人権の話について説明。「人種、民族、国籍、出自、宗教、ジェンダー、セクシュアリティ、障がい」に関する内容を共有。

グループワーク「初めてのフィードバック！！」

4 人 1 組のまま、最初に観察のポイントを簡単にレクチャー。その後、グループメンバーを 2 人ずつに分け、片方のペアがお題について話し合っている様子を他の 2 人が観察してメモ。そして役割を入れ替え同様のことを行う。観察ワーク終了後、ペア同士が話し合い、どのようなことをメモしたのかを共有した後、観察対象となった本人にどのようなフィードバックができるかを考え、原稿を作成する。その際、「私視点を心がける」や「ポジティブ→ネガティブの順で行う」、「相手の自己防衛を高めない」などのアドバイスを行ったうえで作成した。本人へのフィードバックは次週に持ち越した。

［第 14 回授業（1/16）【ケースワークを通して SA 活動を体験する】］

導入、前回の続き

本日のテーマを共有した後、前回のフィードバックの続きとして各自が作成したフィードバックコメントを本人に口頭で伝えた。

ミニレクチャー「観察とフィードバックのポイント」

観察とフィードバックのポイントとして、「コンテント」と「プロセス」の 2 つの側面を紹介。そこにポジティブとネガティブを組み合わせた四象限マトリクスを用いて、観察とフィードバックの際のポイントを共有した。

ケースワーク「SA として起こり得る課題をどう解決する？」

3 人 1 組に分かれて、SA 活動の際に起こり得るケースを提示し、その解決策をグループで考え寸劇にまとめて発表するワーク。ケースは「①八時五十分（1 限の授業が始まる前、8:50 の教室に漂う緊張した雰囲気をどう和ませることができるか）」、「②ケータイ星人（グループワークの最中に携帯電話を触っている学生にどう対応するか）」、「③先輩としてのディレンマ（仲良くなった受講生に「単位の取りやすい授業は何ですか？」と聞かれた際にどう対応するか）」の 3 つを用意。いずれのケースも、今年度実際に SA 活動を経験した学生からヒアリングして考案した。

□成果・課題

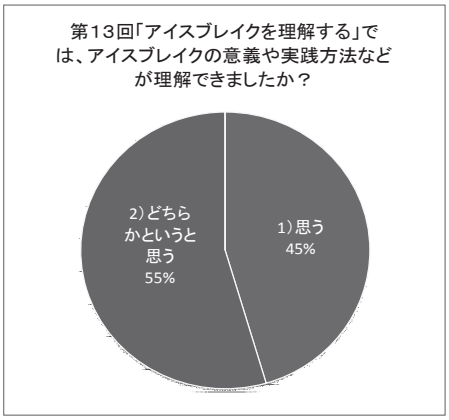
今年度は、昨年度の同科目の課題と今年度の SA 活動の様子、そして担当教員からの要望を踏まえた上で目的を設定し、プログラムをデザインすることができた。本科目は SA 活動の準備・トレーニングという明確な目的があり、今回 F 工房が担当したプログラムも、SA 活動実践を想定して具体的に作り込むことができた。

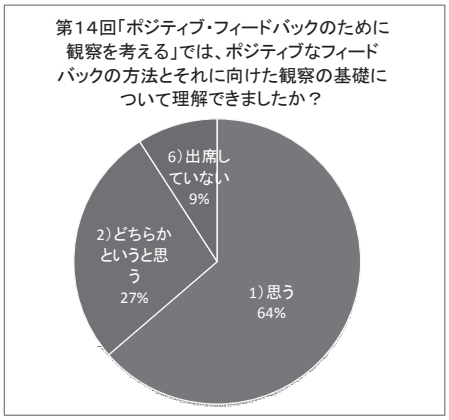
受講生に行ったアンケートの結果を見ると、いずれの回も概ね高評価であったことが分かる。特に、受講生とのコミュニケーションや関わり方に多くのヒントを得た学生が多かったようである。一方で、各回とも内容を詰め込み過ぎた傾向があり「もう少しじっくりと取組みたかった」という声も寄せられた。アンケート結果は以下の通りである。

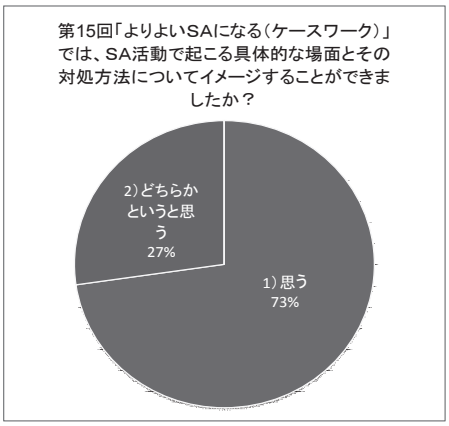
□アンケート結果

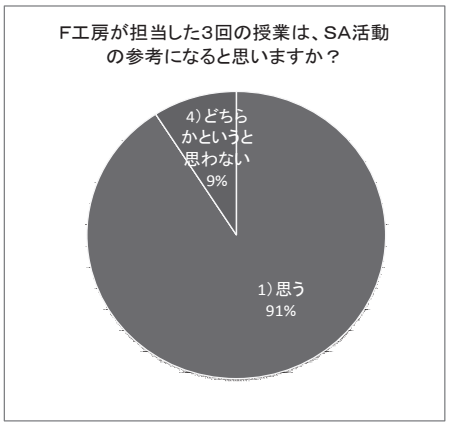
［方　法］最終授業終了後、担当教員を通じて Moodle（e ラーニングシステム）から受講生に Word データを配布。回答生がデータを入力し Moodle を介して提出。

［回答数］11 名（回収率：92%）









【コメント】

・SA として接する際の心構え、注意点など様々なことを勉強することが出来ました。
・プログラムや形式的なこと（フィードバックの仕方）以外にも、人権を尊重すること、SA 以前に人と人との間で考えなければいけないことも学び、これらは、私生活、もちろん SA 活動にも参考になると考える。
・ディベートや要約など勉強面での技術だけでなく、人とのコミュニケーションのスキルもSAには必要であると考える。
・最後の 3 回の授業で、今までの授業とは違いわいわいすることができたし、緊張した場をどうやって自分が変えていくのかや、最初の仕方などを学べたからです。
・実際に、何度もアイスブレイクをこなしてきている方々から直接教わることが出来、非常に良い経験になった。SA となったら後輩といかに関わっていくかが重要になっていくと思うので、非常に参考になった。

■学部初年次科目
プレップセミナー（法学部）

□授業の趣旨

1 年次の春学期の段階で、法学部で学ぶのに必要な基礎的能力や知識を身につけることを目的とした少人数演習科目。アイスブレイク実施による関係性の構築やグループワークの体験を通して、チームで活動する意義を考えるべくグループ課題を提供した。

□概要

日　時　　4 月 25 日（金）、6 月 6 日（金）1 限
場　所　　4 号館 4H 演習室
参加者　　受講生 20 名、学生ファシリテータ 1 名、F 工房スタッフ 1 名

□授業運営

［4 月 25 日］

アイスブレイク

10 人ずつ分かれ円を作り、インプロゲーム（身体表現即興ワークショップ）を行った。

情報共有ゲーム「匠の里」

4〜5 人グループに分かれ、各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布。全員で課題（問いかけに答えること）クリアを目指した。

［6 月 6 日］

情報共有ゲーム「9 人のポジション」

4〜5 人グループに分かれ、各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布。全員で課題（ポジションの把握）クリアを目指した。

□成果・課題

各回、F 工房とクラスメンバーとの「コラボレーション」をテーマとし、グループワークを実施した。「読む」・「聴く」・「話す」・「考える」をグループワークの中でいかに意識できたか、また、自分自身への発見や、一緒に取り組むメンバーから学んだことふりかえり、グループメンバーに対してフィードバックを行った。

1 回目のチャレンジにて、周りを気にせず、一人で目標達成を目指したメンバーや、お互いに遠慮し合うグループなど、様々なコミュニケーション形態が見られた。

これらコミュニケーションワークについて、重要なのはふりかえりであるということを再度認識した。日常生活では気付かないコミュニケーションスタイルも、ワークとふりかえるプロセスがあることで、自分に気付いたり、人から気付かされることがある。

2 回目のチャレンジでは、ゲームにおけるリベンジとともに、自身のコミュニケーションスタイルへのリベンジが窺えた。今後はチームビルディングのため・自分に気付くため・気付き合うためのワークとしてさらなる改良、新規クライアントへの提供を図りたい。

入門セミナー（文化学部）

□授業の趣旨

新入生が学部の環境にスムーズに適応できるようにデザインされた授業。受講生同士、受講生と教員のあいだに「何を言っても聴いてもらえる」関係をつくる中でアカデミックスキルを学びつつ、文化研究への初歩的なプロジェクトに取り組む。受け身のスタンスをリセットするとともに、学部教育へのモチベーションアップを図る授業である。

F工房は、アイスブレイクやワークを通して関係作りの支援を行った。

□概要

日　時　　4月7日（月）、21日（月）3限
場　所　　5号館5321演習室
参加者　　受講生25名、学生ファシリテータ1名

□授業運営

［4月7日］

サークルコレクション

全員で一つの円をつくり、円を組み替え自己紹介しながら出来るゲームを複数行った。

キーワードコレクション

ペアワーク。各自、自分のことを表すキーワードを文字や絵で表現する。ペアを組み自己紹介をしながら、お互いのキーワードについて紹介し、お互いのキーワードをリストに記入する。なるべく多くの人と対話することを目標とした。

名前覚えワーク

全員で一つの円をつくり、順番に名前を名乗る。2周目より、「○○さん、○○さんの隣の△△です。」という要領で、クラスメイトの名前を覚えることを目指した。

［4月21日］

情報共有ゲーム「匠の里」

4〜5人グループに分かれ、各メンバーに情報の書かれたカードをランダムに配布。全員で課題（問いかけに答えること）クリアを目指した。

□成果・課題

ペアから4、5人グループと段階を経ることで、無理なく関係の構築が行われていたと感じた。またグループワークでは自身やメンバーの行動について認識を深め、共有を行えていたと考える。今回、先輩学生ファシリテータ（今回は他学部生）に運営を任せたことで、より安心感ある親しみやすい雰囲気が生まれたと同時に、先輩・後輩相互に学生生活へのモチベーションが向上する様子が窺えた。今後、さまざまな学部において、学生ファシリテータによる新入生の支援を幅広く行っていきたいと考える。

■その他
アイスブレイクの実施（初回授業等）

《イタリア語エキスパートⅠ（共通語学）》

□授業の趣旨

共通教育科目の語学授業で、他の語学授業とは違い、週に4コマ（他の「楽しく学ぶ…」は週に2コマ）同一メンバーにて開講されるのが特徴である。通年科目。

□概要

日　時　　4月7日（月）4限
場　所　　12号館12523演習室
参加者　　受講生27名、学生ファシリテータ1名、F工房スタッフ2名

□授業運営

初回授業のアイスブレイクとして、F工房定番の「サークルコレクション」と「Common!! Everybody」をイタリア語に改良した「Ciao a tutti !（チャオ・ア・トゥッティ）」を実施。

「サークルコレクション」では、全体で円になって身体を動かしながら交流を図った。

「Ciao a tutti !」はタイトルだけでなく、ペアになった時のあいさつ、ペアを解消する時のあいさつをイタリア語で行う工夫を取り入れている。なお、本ワークは、担当教員との協働によって2011年度に開発したものであり、以後毎年使用している。今年度は共通点を見つけ終わった後のお礼（「Grazie」ありがとう）に対して、「Prego（どういたしまして）」と返す形にした。（昨年度までは「Grazie」と返していた）

いずれのアイスブレイクにも、担当教員が一人の参加者として参画し、受講生と積極的にコミュニケーションを取ってもらう形とした。また、F工房から学生ファシリテータ（イタリア語を専攻している学生）も参加し、最初にイタリア語の例を示してもらった他、ワーク中はコミュニケーションを促進する役割で、参加者に混じってワークに参加した。

□成果・課題

4年目となる同科目でのアイスブレイク実施だが、初回授業にアイスブレイクを行うことで、クラス内に安心感が生まれ、メンバーの交流も活発になったとのフィードバックを今年度も頂いた。

一方で、今年は例年に比べて受講生数が多く、アイスブレイクの際も「誰とまだ話していないのか」が分かりにくい状況が生まれた。20名を超えるとアイスブレイクの質が変化するのではないか、という仮説を立てるに至った。

4）課外活動の支援
学生FDスタッフ 燦（SAN）

《燦メンバーへの研修》

□テーマ・趣旨

学内において学生 FD 活動（学生 FD イベントへの参加や、学内の教職員と学生が集まり対話の場を創出する「京産共創プロジェクト」の企画運営等）を展開する団体「学生 FD スタッフ燦」からの依頼により、新規メンバーに対するファシリテーション研修を行った。今回は、ファシリテーションの基礎知識を学び、どのようなテーマの場であってもファシリテータとして振る舞うことができるようになることを目指すことが目的であった。燦のメンバーとの話し合いを交えながらプログラムが確定した。

□概要

日　時　　7 月 2 日（水）16:45-18:15
場　所　　4 号館 4F 演習室
参加者　　15 名（職員 1 名含む）

□内容

導入・アイスブレイク

ファシリテーションの経験値を 1〜100 の数値で表し一列に並び、作りたいグループ数分番号をふり、グループ分けを行った。その後、研修での心構え（体験を通して学ぶ、人のいい所は真似る、建設的な意見交換をする）を共有したのちフリップ自己紹介を行った（A4 用紙を 4 分割し、名前・ココにいる理由・燦で活動する上での自分の目標を記入し、グループメンバーにむけて紹介する）。

グループワーク―「参加者の立場に立って想像してみよう」
そもそもなぜファシリテ―タは必要か。各自の体験から考える―

付箋にメンバーそれぞれがこれまで体験してきたグループワーク（友人との旅行の企画等身近な例も含む）を書き出し、それぞれの項目について、どのような時にグループワークの良さや、楽しさを感じるか、不安や悩みを抱えるかについてそれぞれ別色の付箋に挙げる。最後に、「話しやすい・心地の良い話し合いの場には、どのような要素があるか」、また、「話しにくい場においてどのような要素があればよかったのか」についてアイデア出しを行い、グループ横断型で共有した。後にレクチャーにてファシリテーションの必要性や、実際の振る舞いについて明示をし、最後に各自研修の参加目的をふりかえり、気付きや学び、疑問に思ったこと等を共有して終了した。

□成果・課題

どのようなテーマの場であってもファシリテータとして振る舞うことができるようになることを、燦メンバーは「場を回せるようになること」と表現していたが、回すことが目的になってしまうのは本末転倒である。またどのようなテーマでも対応できるようになるには、考え方やスキルに加え、時に事前の情報収集・専門分野に関する研鑽も必要であると考えるため、簡単に設計できるものではないと感じていた。検討した結果、対応するた

めに必要であろう項目として、「自分や人の観察」「適切な問いかけ」「事前学習」「（話し方、まとめ方等）引き出しを多く持つ事」「場を楽しみながら人から学ぶ姿勢」をレクチャーにて明示し研修を終えた。今後は、上記明示内容について、体験的な研修に落とし込む手法を考えること、参加者がファシリテータとして振る舞う実践のワークを取り入れるために、改良を行うことを課題とする。

《学生FDサミット2014夏 第4分科会》

□テーマ・趣旨

「ファシリテータのしゃべりバナレに次の一手」

―しゃべり場に「慣れる」ことで本当にしゃべることから「離れ」ていないか？―

学生 FD 団体において「しゃべり場」が頻繁に行われるあまり、しゃべることに慣れてしまう「しゃべり場慣れ」状態となり、自分自身が楽しんでいなかったり、参加者の気持ちを尊重できず、結果として対話とは程遠い「しゃべり離れ」が起きているのではないか？という問いかけをテーマとして掲げ、実りあるしゃべり場を創るためにファシリテータとして心掛けたいことを体験型研修によって学び合うことを企画した。燦のメンバーとともに企画した分科会である。

□概要

日　時　　8 月 24 日（日）12:45-15:00
場　所　　12 号館 12303 教室
参加者　　38 名

□内容

導入・アイスブレイク

企画に至った背景を説明した後、構造化していないアイスブレイク(普通の自己紹介)を実施。それぞれのアイスブレイクの間の気持ちについてふりかえった。その上で、グループワーク等で生じる不安や不信等を示す「ギブの 4 つの懸念」について説明を行った。ファシリテータは集団において、メンバーの気持ちに寄り添ったり、自身の行動を客観的にふりかえりながら、少しでも懸念を減らす役割を果たす必要があることを伝えた。

しゃべりバナレがもたらす功と罪

しゃべり場に慣れることによって起こる功罪についてそれぞれ付箋に書き出しグループメンバーで意見共有をおこなった。これらを踏まえ、それぞれのメンバーがファシリテータとして、どう振る舞っていくかを「次の一手」という名目で、プロッキー片手に、自分の掌に決意を記載した。

□成果・課題

ほとんどの参加者がファシリテータの経験があり、具体的な体験を通してしゃべりバナレのイメージをつかみやすかったと考える。またレクチャーを交えながらお互いに功罪についての意見交換や、「しゃべり場」実践を交えながら研修を行うことで、自身スタイルの相対化を図ることができたのではないかと考える。課題は時間を長くしてほしいとの要望が何点かよせられた。レクチャーと参加者の実践の場の配分を検討していく必要がある。

英語研究会（ESS）

□経緯・概括

本学文化系クラブである英語研究会（ESS）のカンバセーション・セクションとの協働企画。同セクションでは、毎回グループで英会話を行いながら語学力向上のための活動を行っているが、そのグループの中で重要な役割を果たしているのが、「チア・パーソン（以下、CP）」と言われる話し合いの進行役である。CP はメンバーから意見や話を引き出したり、質問を投げかけたりしながら、グループ内の英会話が盛り上がるように働きかける役割を担うが、これはまさにファシリテータの役割と同質である。

今回、ESS メンバーである学生からの働きかけにより、CP のファシリテーション力向上とこれまで培ってきたスキルの言語化、今後のより良い CP ならびにカンバセーション活動につなげることを目的としたイベントを、以下の 2 回にわたり開催した。

なお、イベント開催までに、ESS の 3 年次生の学生（チーフを含む数名）と度重なる打合せを実施し、イベント実施後にはふりかえりを実施した。

《ESS×F工房　コラボ企画　第1弾/チア・パーソン向上セミナー》

□テーマ・趣旨

ESS カンバセーション・セクションメンバー全員を対象として実施。「みんなが CP になる」をキャッチフレーズとして、CP を限定しその一人に頼りすぎるのではなく、メンバー一人ひとりが CP の役割を担うことで会話全体を活性化させることを想定し、そのために必要なファシリテーションについてメンバー全員で学ぶために実施。

「CP がうまく機能し会話に活気があふれる」ことを到達目標に、現状の CP としての工夫などをお互いに出し合い、足りない知識などを F 工房のレクチャーを通して学ぶ内容とした。また、共有し合った CP のスキルやノウハウについては、それらをまとめて文章にし、後日全員に配布する形で全体共有することにした。

□概要

日　時　　6 月 27 日（金）16:50～19:00
場　所　　雄飛館ラーニングコモンズ
参加者　　約 35 名

□内容（イベントの進行は ESS の学生がメインで行った）

<u>オリエンテーション</u>

グループ分けを行った後、今回のイベント開催に至った背景と実施する目的の説明。F 工房の紹介。グループは学年比や男女比などを考慮した。

<u>グループワーク①「現状理解」</u>

ホワイトボードを使って、CP の「良い所」と「悪い所」を出し合った。その際、CP 経験がある人とそうでない人の意見を切り分けた。進行は各グループにいる 3 年次生が中心となって行い、意見を出し合った後は、他のグループの意見を見て回る形とした。

<u>グループワーク②「どんな CP がいれば会話が盛り上がるか？」</u>

付箋紙と模造紙を使って、「どんなCPがいれば会話が盛り上がるのか」について、個人で意見を出し合った後、グループで話し合った。CPの行為、発言、態度など様々な観点からCPについて考えた。模造紙にまとめた後、グループごとに全体の前で発表した。

レクチャー「ファシリテーションとは何か」

ファシリテーションに関する基本的な情報を提供。そして、CPとファシリテータとの類似性を見出しながら、ファシリテータに必要なマインドとスキルについて説明。スキルは、傾聴、観察、質問、介入、フィードバックを紹介した。

□成果・課題

ESSとの初めてのコラボレーションイベントとなる本企画では、CPの現状を共有した後、活気あふれる雰囲気の中で、理想のCP像について話し合われた。話し合いは具体的かつ建設的であり、メンバーそれぞれがグループでの話し合いに慣れている印象を受けた。これは、日々グループ活動を行っているカンバセーション・セクションの特長だと思われる。

一方で、ファシリテーションの認知度については高くなかった。今回のレクチャーは、実際にはファシリテータとしての役割を果たしていると思われるメンバーに対して、ファシリテーションという新たな概念を提供する場になったと言える。

しかし、今回のイベントだけでは、これまでのESSの活動を総括できないため、引き続きコラボレーション企画を行うこととなる。

《ESS×F工房 コラボ企画 第2弾/ Let's stich!～カンバセ全体で思いを共有しよう～》

□テーマ・趣旨

春学期の第1弾に引き続き、ESSとF工房とのコラボレーションイベント第2弾を実施。今回は、「上回生と下回生との考えのGAPを埋める」をキャッチフレーズに、現状の上回生、下回生の思いを共有し、これからのカンバセーション活動をより実りあるものにすること、そして来年に向けて全体で思いを統一することを目的として開催した。

また、イベントの後には、クラブを引退する3年次生がイベント内容やこれまでの経験を踏まえたうえで、CPとしてのスキルやノウハウを言語化し、後輩に引き継ぐ形になった。

□概要

日　時　　10月24日（金）16:50～19:00
場　所　　11号館11307教室
参加者　　約40名

□内容（グループワークの進行はESSの学生が行った）

オリエンテーション

学年比を考慮してグループ分け。その後、全体の趣旨説明。

グループワーク①「良い先輩になるために」

「良い先輩になるためにはどのような心構えや能力が必要か」について、個人で付箋紙

に書いた後、模造紙に出し合いながらグループメンバーと共有。この時、3 年次生と 1、2 年次生の出した意見の違いを中心に話し合う。

グループワーク②「CP がメンバーに求めているもの、メンバーが CP に求めているもの」

「CP がメンバーに求めているもの」と「メンバーが CP に求めているもの」について話し合う。「求めているもの」とは、姿勢や行動、考え方などである。意見は付箋紙に出し模造紙に貼っていく形で共有した。また、付箋紙に意見を書く際、3 年次生と 1、2 年次生とでは付箋紙の色を変えた。また、模造紙に貼る時は、「CP がメンバーに求めているもの」と「メンバーが CP に求めているもの」とで区切った。

出た意見をグループ内で共有し、整理した後、全体発表を行った。

レクチャー「チア・パーソンとファシリテーション」

普段のカンバセーション活動の中で起こっていることを、「コンテント」、「プロセス」、「English」の 3 つの側面に分解して説明。普段の活動で行っている「ふりかえり」の質を高める一助として紹介した。また、CP としてグループメンバーの自己防衛を意識し、それを低める働きかけが求められることも紹介。

□成果・課題

春学期に引き続いての今回のイベントは、3 年次生が自分たちのマインドを後輩に伝えることも意図した内容であった。F 工房としては、カンバセーション活動を 3 つの側面に分解して説明できたことが大きな成果であった。すなわち、カンバセーション活動の中で CP やメンバーが意識していることは、「コンテント（トピックに関する内容的側面）」なのか、「プロセス（コミュニケーションで生じる様々な事象（コンテントを除く））」なのか、「English（英語習熟度や語学力に関する側面）」なのかを分けて考えることで、より良いカンバセーションが展開できるのではないか、と指摘できたことに、今回のイベントの成果を見出すことができる。また、それら 3 つの側面を意識しながらカンバセーションのふりかえりを行うことで、ふりかえりの意図が明確になったとのフィードバックを ESS の学生からもらうことができた。

カンバセーションでの CP は、ファシリテーションとの親和性が非常に高いため、今回のコラボレーションが実現した。一方で、課外活動でのファシリテーションのニーズはまだまだ多くあると思われるため、今後も課外活動に向けた広報を続けていく必要があるだろう。

第36回クラブリーダー研修会

□テーマ・趣旨

本学志学会執行委員会の学生からの依頼。同委員会が毎年開催している全クラブのリーダーを対象とした研修会をワークショップ形式にアレンジしたいとの要望を受け、F 工房は当日のプログラムデザインを担当学生と一緒に行った他、当日にワークショップの運営を担当する同委員会の学生を対象としたファシリテーション研修を実施。イベント当日、F 工房スタッフはスーパーバイザーとして全クラスの様子を見学した。なお、当日のプログラムは計 5 回の打合せを行ってデザインした。

□概要

[志学会執行委員会メンバーへのファシリテーション研修]

日　時　　2 月 10 日（火）13:00～16:00
場　所　　4 号館 4F 演習室
参加者　　9 名、F 工房スタッフ 1 名

[第 36 回クラブリーダー研修会]

日　時　　2 月 12 日（木）12:30～15:35
場　所　　4 号館 4C、4D、4E、4F、4G 各演習室、401 教室
参加者　　約 90 名、F 工房スタッフ 1 名

□内容

[志学会執行委員会メンバーへのファシリテーション研修]

オリエンテーション

F 工房についてと本日の趣旨を説明。

当日のワーク説明

当日のプログラムと進行方向について担当学生より説明。

ワークの進め方について

当日実施する「ワールドカフェ」のワークについて、そのルールを把握するとともに、それを進行する際に気を付けたいことについて、グループワークを取り入れながら共有する。

[第 36 回クラブリーダー研修会]

自己紹介・アイスブレイク

グループになったメンバーと自己紹介。

グループワーク①「穴埋め問題」

クラブ活動に関するルールを穴埋め問題として出題。グループメンバーで話し合いながら、その問題を解答していくワーク。昼食を取りながらリラックスした状態で行った。

グループワーク②「ワールドカフェ」

クラブのリーダーが抱える問題を、ワールドカフェの手法を使ってクラス内の色んなク

ラブリーダーと分かち合い、解決方法を共に考える形式で実施。カフェのようなリラックスした雰囲気の中で、「新入生勧誘」や「部員のモチベーション」、「上下関係」に関する課題や悩み、実践例などについて、クラブの枠を超え話し合った。

□成果・課題

今回、初めて志学会執行委員会との協働を行ったが、企画を担当した学生からは、「例年は、ディスカッション形式や講義方式で行っていたが、意見が出にくいなど、話し合いがなかなかうまくいかないと聞いていた。今年は話し合いの場を活性化したいと思い、ワークショップ形式の導入を考え F 工房に相談した。事前の研修で当日の進行をイメージし、当日は、志学会メンバーそれぞれが工夫しながら進行を行っていた。和やかな雰囲気の中で参加者は課題に対して意見を出し合っていた。事前準備は大変だったが、ワークショップ形式にチャレンジして良かった。」とのコメントをもらった。

ワークショップ形式を取り入れることにより、これまであまりつながりのなかった、クラブリーダーの横のつながりが形成される機会となった。また、志学会執行委員会という伝統ある団体とのコラボレーションは、学内にファシリテーションを普及するうえで、非常に重要であり意義深い。今後も引き続き連携していきたい。

5）学外での発表・講演
■他大学

《一橋大学》
2014年度 第6回アカデミック・キャリア講習会

□テーマ・趣旨

一橋大学男女共同参画推進本部および学生支援センター・キャリア支援室（大学院部門）が、アカデミック・キャリアを志望する大学院生等を対象に開催した「第6回アカデミック・キャリア講習会『大学で教えるということ―多様化する教育現場のなかで―』」の第1部「学びの場の雰囲気づくり――アイスブレイクの意義と方法」で講演を行った。

同講習会は、将来大学教員になるために必要となる教育技法の習得と、多様化の進む大学の現状をOB／OGから聞くことで、大学教員としての将来像を描くことを目的に実施されたものである。

□概要

日　時　　1月30日（金）13:00-18:00
場　所　　一橋大学　国立東キャンパス（東京都国立市）
参加者　　16名

□内容

F工房スタッフは、学びの場の雰囲気づくりのための手法の一つである「アイスブレイク」について、本学の実践例を踏まえながら100分間の講演を行った。

講演は〈自己紹介／本学F工房の紹介〉、〈アイスブレイクを体験〉、〈ミニレクチャー：アイスブレイクの意義と方法〉、〈グループワーク：アイスブレイクの問いかけを考える〉の流れで行い、体験と講義を組み合わせた、F工房定番の運営方法で実施した。

〈アイスブレイクを体験〉では、様々な種類のアイスブレイクを目的別に体験し、その効果を肌で感じてもらった。また、〈ミニレクチャー〉の際は、F工房活動を通して得られた知見やノウハウを、理論と実践知を組み合わせて提供することができた。後半の〈グループワーク〉では、実際に自己紹介をしてもらう際に使えそうな問いかけ（質問）を個人で考え、それをグループで共有しながらカテゴライズした。そうして完成したアウトプットは、そのまま各自の現場で使えるように、参加者それぞれが写真に撮って持ち帰った。

□成果・課題

本講習会で講演するのは3年目となるが、毎年内容をブラッシュアップして実施している。参加者からは、「自分が現在担当している非常勤の授業で実践してみたい」等のコメントを頂いた他、昨年も参加していた方からは「今年、自分の担当する授業でアイスブレイクを実践したら、すごくうまくいった」との報告も頂戴した。一方で、「そもそも学生が授業内でアイスブレイクしたいと思っているのか？講義は聞くだけと思っている学生にアイスブレイクをすると、余計に授業が凍り付かないか？」との新たな指摘もあった。この問いについては、今後も検討していきたい。

■その他

《京都ジョブパーク》
共催シンポジウム プレイベント in 京都ジョブパーク

□テーマ・趣旨

京都ジョブパークと京都キャリア教育推進協議会の共催シンポジウム「プレイベント in 京都ジョブパーク」に登壇者として参加。「多様化する学生に向き合う大学キャリア教育の現状と課題～未就職予備軍の回復力（レジリエンス）をどう引き出すか？～」をテーマとした本シンポジウムに、F 工房スタッフ 2 名は第 1 部の事例紹介 I に報告者として登壇。本学のキャリア形成支援教育科目「キャリア・Re-デザイン I 」の 9 年間にわたる取組みを紹介した。

また、第 2 部のパネルディスカッションでは、F 工房事業統括の鬼塚がモデレータ、担当コーディネータの中西がパネリストとして登壇し、「多様化する学生にどう向き合うのか」をテーマに、他のパネリストと活発な意見交換を展開した。

□概要

日　時　　1 月 31 日（土）13:00-17:00
場　所　　京都テルサ　東館（京都市南区）
参加者　　84 名（大学関係者、高校関係者、キャリアカウンセラー、企業・行政・NPO 関係者）

□内容

［事例紹介 I ］

イベント当日の第 1 部事例紹介では、「ファシリテーションの定着による個の活性化と自律への取組み」と題して、本学の「キャリア・Re-デザイン I 」について紹介した。トップアップが目立つ大学のキャリア教育の中で、本科目はボトム層に焦点を当てた上で徹底した支援型授業を展開していること。そして、学生の「能力伸長」ではなく、モチベーションの再発見を眼目としていること、の 2 点について、担当教員の鬼塚が発表を行った。

後半は、元受講生であり、元学生ファシリテータであり、現在は同科目のコーディネートを担う中西が、受講時の自身の変化や学生ファシリテータとしての学び、そして授業の風景や受講生との印象的なエピソードについて、具体例を交えて紹介した。

［Session 1 ：パネルディスカッション］

第 2 部では、「ノンエリート大学」の学生や勉学に意欲の低い学生、そして未就職予備群と言われる学生層に対して、各セクターはどのような形の支援ができるのかについて、高校、大学、企業、行政の各セクターを担当するパネリスト 5 名が活発な意見交換を行った

パネルディスカッション後は、第 1 部からの流れを振り返りつつ、参加者同士がグループワークを通して現状について話し合い、関係者間のネットワークを創出するプログラムを行い終了となった。

□成果・課題

今回のようなキャリア教育にかかわる様々な関係者が集うイベントで、本学の特色ある科目「キャリア・Re-デザインⅠ」の取組みを発信できたこと自体が大きな成果であった。

今回のイベントは、7 月に京都ジョブパーク大学生・留学生コーナー担当者との出会いを契機に開催に至った。京都の各大学とも未就職予備群と言われる層の学生に対する支援に苦慮している現状があり、そこに京都ジョブパークが中心となって、何かしらの対策が打てないものか、という問題意識から今回のイベント開催に至った。F 工房は、今回のイベントの企画段階から担当者と協議を重ね、イベント当日のプログラムデザインの部分にもかかわった。

本シンポジウムは、あくまで「プレ」イベントであり、今後、各セクターが連携し組織を横断したネットワークをベースにしながら、様々な具体的支援や対策が進んでいくことが期待される。F 工房もその一端を担えるよう、今後も継続的に情報交換していく必要がある。

《大学コンソーシアム京都》
2014年度 第20回FDフォーラム 第14分科会

□テーマ・趣旨

第 14 分科会において、登壇の依頼をいただいた。「モチベーションクライシス」がテーマとして掲げられ、本学のキャリア形成支援教育科目「キャリア・Re-デザイン」を紹介した。本科目は、教職員・元受講生がファシリテータとして授業設計を行うとともに、学生の輪に入り対話を展開する授業である。自分の中に「アタリマエ」として存在している考え方、無意識あるいは意識的に縛られている価値観を様々なグループワークを通して他者と共有する。教員・職員・元受講生・受講生との関係性等について紹介をした。

以下は FD フォーラム第 14 分科会の概要である。

大学では 4 年間の高等教育による支援を実施し、卒業して豊かな知識や技術を身につけて社会に巣立っていく若者たちを送り出す機関である。だが近年は入学後にすぐに登校しないケースや途中の学年で退学していく学生も増えている。多くの大学ではこれら学生への抱える悩みや不安などに対応するためにさまざまな支援策の実施がなされていると思われるが、その策の効果について多くの大学が事例を持ち寄り確かめ合う必要がある。例えば、学生相談に対する取り組みと課題、修学支援としての取り組みと課題、学習支援のための取り組みと課題、ピアサポートによる取り組みと課題などが考えられるが、モチベーションクライシスに向き合い、学生たちを支援していく場合には、教員はもちろんのこと、保護者や関係機関団体の連携も必要である。今回は、教員と職員が協働して行う連携支援の必要と実際についての事例報告後に参加者によるグループワークを行うこととする。

※モチベーションクライシス

大学生の学習（大学生活）に対する意識の危機的な低下とする。

□概要

日　時　　3 月 1 日（日）10:00-15:30
場　所　　同志社大学　今出川キャンパス（京都市上京区）
参加者　　約 45 名

□内容

午前中は登壇者 4 名の報告が行われた。

・大谷麻予/京都産業大学 共通教育推進機構
・真砂照美/広島国際大学 医療福祉学部（学び合う主体－五感力を活用した分かる授業の提案）
・永野典詞/九州ルーテル学院大学 人文学部（ソーシャルワーク理論と技術を用いた学生支援の事例報告－家族と教員の協働による退学からの回避－）
・窪貴志/株式会社エンカレッジ 代表取締役（発達障害学生に特化した学外クラブ活動＆インターンシップ実践）
・三好明夫/京都ノートルダム女子大学 生活福祉文化学部教授（コーディネーター）

本学の報告は、本学の特徴や、F 工房の紹介を簡単に行った上で 20 分ほど行った。「キャリア・Re - デザイン」については、開講の概要や頻度を簡単に紹介した後、受講生像について触れた。受講生像はなんらかの理由で「授業から足が遠のき」、結果的に「低単位」になった学生のことであり、科目の目的は、①授業で出会う様々な他者と信頼関係を構築し、多様な価値観の存在に気づくとともに、社会や人間関係に対するリアリティを獲得する。②自らの現在の状態（理想的な大学生像を体現できていない自分、低単位の状態にある自分）を俯瞰する視点を獲得する。④現在の自身の状態を踏まえたうえで、次に向けての一歩を踏み出そうとする。

今回の報告では、運営体制や、ファシリテータとしての教員・職員・元受講生のかかわり方、実際にあったエピソードに重きを置いて紹介を行った。

ファシリテータとして、同じ目線でかかわること、授業の態度等で相手のことを決めつけず、様々な背景や相手の気持ちを想像すること。ファシリテータも授業を受ける感覚で、自分について考え、クラスのメンバーと話すこと。など、低単位や低意欲というラベルに囚われない、一人の市民として人と接することを心がけている授業であることを紹介した。

□成果・課題

本学の取り組みについては、様々質問が寄せられた。グループワークについていけない学生の対処法、実際にグループワークは成り立つのか、F 工房ではファシリテーション研修をどのように行っているのか、履修のきっかけや、目的はどのようなものか、単位の取得率、留年者が減ったという兆しはあるか、など多岐にわたった。

大学に対するモチベーションクライシスの問題については、参加大学のほとんどが頭を抱えている様子が窺えた。本学においては、教員・職員・学生の協働のもと、様々な人がそれぞれの個性を活かしながら授業にかかわるという特徴がある。この仕組みはかなり貴重なものではないかと今回の分科会を通して感じた。複数の教職員が集まること、グループワークを支援する F 工房があり、そこでファシリテーションについて学びながら授業に関われることなど、なかなか体制として構築するハードルが高いものを実現出来ている。

一方で、課題もある。実際に留年者が減ったのか否かについての調査や授業履修後、卒業後の変化等、定性的な調査が出来ていない部分である。現場の感覚として、学生それぞれが、授業を通してなんらかの形できっかけをつかみ、大学生活に戻っていったり、就職活動をやりなおしたり等は見えてきたが、実際そうした受講生の割合がどのくらいいるのかについては、正確に把握できていない。今後は、そうした定性的調査を行うことを予定している。

こうしたことに改めて気付くことができる分科会での発表・質問・グループワークについて大いに可能性を感じた。教員におけるワークショップの実施という面でも今後参考にしたい会となった。

6）学外への調査

《日本キャリア教育学会 第36回研究大会》

□テーマ・趣旨

1979年に創設された日本キャリア教育学会（旧日本進路指導学会）は小中高校と大学教職員が一堂に会するキャリア教育領域で最も権威ある学会である。

今回、F工房の主たる事業である「1：学生支援」「2：ファシリテーションの普及・ファシリテ―タの養成と教育効果」「3：授業支援」に関して、他教育機関における取り組み及び研究成果を調査し、F工房の事業発展に活用する目的で学会に参加した。

具体的には、1：所属する学生ファシリテータの教育・指導・管理（今年度54名）、F工房にかかわるクライアント学生の大学生活意欲向上に繋がるプログラム開発・教育効果の測定、2：授業以外の教育プログラムの運営体制の検討、3：教員との業務分担明確化、支援体制の強化が現状の課題であり、それについて参考になる事例等、有効な情報を得るべく参加した。

□概要

日　時　　11月22日（土）-23日（日）（22日：13:00～16:45・23日：9:20～17:00）
場　所　　琉球大学　千原キャンパス（沖縄県西原町）
参加者　　2名（本学教員：1名、F工房スタッフ：1名）

□内容

（1）公開記念講演
「キャリア教育とキャリア発達再考」
－沖縄県におけるキャリア教育と中高校・大学のキャリア発達－
（2）シンポジウム
「学校におけるキャリア教育の経緯、現状と今後」
（3）ポスターセッション
・自覚的キャリア形成における要因分析：主観的キャリアと客観的キャリアの視点から
・奈良学園大学におけるキャリア教育の取組み
－大学一年生を対象とした「キャリアデザイン1」を通して
・大学進学動機と大学生活の過ごし方がキャリア発達に与える影響等
（4）個人研究口頭発表（ロング発表）
「初年次教育科目における学生ファシリテータ活動に関する考察」
－K大学キャリア科目担当学生ファシリテータ（キャリファシ）制度の効果－
※本学教員（全学共通教育センター准教授）、F工房スタッフ2名で発表
（5）シンポジウム
「Japanese career education “KO・KO・RO・ZA・SHI”」
－高校生を対象とした「志」の発達を促す心理的要因の模索－
（6）個人研究口頭発表（ショート）
・学生の変容に力点をおいたキャリア教育

－大阪工業大学情報科学部・低年次キャリア教育の実践と学生の変容－
・アクティブ・ラーニング型キャリア教育実施時の評価指標に関する考察
・産業界との協働によるキャリア育成教育プログラムの効果と課題
・授業実践課程において地域の外部人材を活かす際の教師の役割について
・教えない授業－社会参加をテーマにした体験学習からの学び－
・企業が工業高校生に求める人材像　－B 高校のアンケート調査から－

□成果・課題

今回の調査訪問を通じて特に参考になった部分を紹介する。

シンポジウム「Japanese career education “KO・KO・RO・ZA・SHI”」において、人の成長には、志が必要と主張がなされていた。志とは自身が逆境に陥った時（個人的達成…自ら挑戦し達成する）、様々な人に話を聞いた際（代理学習…ロールモデル）、読書の登場人物のように自分もなろうと思ったとき（言語的説得）、物事に感動したとき（情緒的覚醒）に立つと挙げられている。

沖縄の各高校ではそれぞれ志（進路）に関するプログラムが様々展開されている。糸島農業高校では、高校 1 年生時から「ユメカツ（夢活）」－「SST」プログラムというものが展開されており、その中で、自分づくり（意見・感じ方・人生）、相手の話を聞く、共感する、自分の気持ちも伝える等アサーション的トレーニング、問題や課題の解決策を考える等の活動が行われている。自分を活かし、他者を活かすディスカッションの仕方等について体験型で授業が行われる。志に重点を置いたプログラム展開による自己効力感の向上の可能性を感じ、F 工房では、これを参考に、学生ファシリテータに向けた研修会や講座において、単にファシリテーションを身に付けるプログラムではなく、学生それぞれが志を意識できるようなプログラム展開を行った。具体的には、プログラム内で、相手の話を聞きながら論点を整理するコンサルテーション、それぞれの抱えている現場についての意見交換、具体的な理想の学生ファシリテータ像を複数回検討する等を行った。これにより、学生自身が活動の目的を意識し易くなると感じた。

課題としては、志を持つ基準や、それによる変化を測定することである。実際に志については、福岡県立小倉高等学校・株式会社リードキャリア・北九州市立大学の 3 機関で連携を行いながら効果測定方法を考案しているとのことであった。

キャリア教育の成果を数値で測ることは、容易ではない。今回の学会においては、様々な具体的実践に加えて、多くの各高校や大学がその効果を量的に測定していることが判明した。その手法を参考にしながら、今後は学生ファシリテータ、受講生それぞれの成長実感について検討する必要があると考えた。加えて高大接続を意識する必要も感じた。

また、沖縄県立南風原高校においてグループワーク型の授業が展開されており、教員はファシリテータ的役割を果たしながら、且つ量的調査も行っていることが分かった。報告者の知念先生は、どの教員でも、ファシリテータとして振る舞い、授業の進行もスムーズにいくよう、誰が見ても分かるマニュアルを作成していると仰っていた。F 工房 2015 年度事業である各学部への授業支援のパッケージ化（F 工房提供のパッケージプログラムを各教員が運営できること）に向けて参考になった。今後、お世話になる多くの方と交流の機会を持つこともでき、非常に有意義な調査となった。

7）コンサルティング

《法学部「プレップセミナー」》

□概要

相 談 日　　4 月 1 日（火）

相 談 者　　法学部 3 年次（「プレップセミナー」担当 SA）

□内容

法学部「プレップセミナー」に SA（スチューデント・アシスタント）としてかかわる相談者が、同科目の初回授業で実施するアイスブレイクについて相談。30 分でペアワークと 15 分で全体自己紹介を行う内容についてアドバイスを行った。

※この他、5 月 1 日（木）、6 月 3 日（火）にも、演習科目でのグループ内自己紹介の方法に関する相談が学生よりあった。（いずれも法学部）

《むすび芽フューチャーセッション》

□概要

相 談 日　　6 月 3 日（火）

相 談 者　　むすび芽プロジェクト担当教職員、KSU フューチャーセンタープロジェクト担当教職員（複数名）

□内容

KSU フューチャーセンタープロジェクトが、むすび芽プロジェクトとコラボレーションして開催した「むすび芽フューチャーセッション」の進行方法についての相談。全体会からグループワークへの移行やグループワークの進め方を決める打合せに参加。

《教育寮サマーセミナー》

□概要

相 談 日　　7 月 14 日（月）

相 談 者　　経営学部 2 年次生、法学部 2 年次生他（葵寮、追分寮班長）

□内容

8 月 7 日（木）、8 日（金）に開催される教育寮合同サマーセミナーのグループワークセッションについての相談。「寮生活を通して、今と将来を考える」ことをテーマとしたプログラムを企画するにあたり、プログラムデザインの基本を伝えた。

《第 12 回 SD フォーラム分科会》

□概要

相 談 日　　8 月 1 日（金）

相 談 者　　学長室職員、コーオプ教育研究開発センター職員

□内容

10 月 19 日（日）、大学コンソーシアム京都主催で開催される「第 12 回 SD フォーラム」の分科会についての相談。相談者が担当する分科会が、参加型の場となるようプログラム

デザインにかかわった。計3回の打合せに参加し、アドバイスを行った。

《社会安全・警察学研究所シンポジウム》

□概要

相 談 日　　9月12日（金）

相 談 者　　法学部教員（社会安全・警察学研究所）

□内容

10月17日（金）15時～17時に開催された社会安全・警察学研究所主催のシンポジウム「現代社会と少年非行対策の新潮流」に関する相談。F工房は約20名が参加する第2部のワークショップ運営を担当し、話題提供者の話を踏まえた上で、ワークショップを行った。行政、警察、NPO関係者等がセクターを超えて意見交換できる工夫を施した。

《ピアサポーター向け人権研修会》

□概要

相 談 日　　10月30日（木）

相 談 者　　人権センター職員

□内容

11月15日実施のピアサポーター向け人権研修プログラムについての相談。50分という短い時間で、意見の多様性について知り、アサーティブに人と接することができるようになるための参加型プログラムのデザインについて担当職員と共に考えた。

《世界問題研究所主催　学生ワークショップ》

□概要

相 談 日　　11月11日（火）

相 談 者　　法学部3年次生

□内容

12月13日（土）に開催される世界問題研究所主催の学生ワークショップ企画担当の学生からの相談。グループワークセッションのテーマや進め方など、プログラム全般について計5回の打合せを行って決定した。また、当日はF工房から学生ファシリテータを4名派遣して、グループワーク時にファシリテータ役を担当した。

《グローバルサイエンスコース　月例交流イベント》

□概要

相 談 日　　11月26日（水）

相 談 者　　学長室グローバル推進室職員

□内容

同日に開催されるグローバルサイエンスコースの学生を対象とした交流会で、コミュニケーションが苦手な学生でも色んな人と交流できるようなワークについて相談を受ける。二択問題を二問投げかけることにより四象限に分かれ、近くにいる人と話すワークを提案。

《コンピュータ理工学部　新入生オリエンテーション》

□概要

相 談 日　　12 月 12 日（金）

相 談 者　　コンピュータ理工学部事務室職員

□内容

4 月に開催する新入生同士が仲良くなるためのイベントについての相談。計 4 回にわたる打合せの中で、担当教員にも参加頂き、プログラムの内容と運営体制を決定。F 工房は事前研修を企画・運営する他、学生ファシリテータも派遣することになっている。

《フレッシャーズ・コミュニケーション》

□概要

相 談 日　　12 月 18 日（木）

相 談 者　　同窓会担当職員 2 名

□内容

4 月 11 日（土）、12 日（日）に開催される同窓会主催「フレッシャーズ・コミュニケーション」のプログラムについての相談。計 3 回の打合せで当日のプログラムを決定した他、F 工房は事前に在学生ボランティアに対する研修も行うことになっている。

《理学部　入学前教育》

□概要

相 談 日　　1 月 28 日（水）

相 談 者　　理学部事務室職員

□内容

3 月 30 日（月）実施の理学部入学前教育のプログラムについての相談。前年度は、丸 1 日かけて外部業者が運営していたプログラムを、同じ趣旨のまま半日のプログラムに圧縮するためのプログラムを先輩学生と共に考案。その他、先輩学生スタッフに対する事前研修と学生ファシリテータの派遣を行う予定。

《文化学部スターティング・セミナー2015》

□概要

相 談 日　　2 月 5 日（木）

相 談 者　　文化学部担当教員 3 名

□内容

4 月 4 日（土）に実施する文化学部新入生対象のプログラムについて、昨年の振り返りをしつつ今年度のプログラムを担当教員とデザイン。学生ファシリテータのリクルートも行う。

第２部　活動から得られた知見

1.「キャリア・Re-デザインⅡ」の取組みについて
―ラジオドラマ作成を通じた対話型キャリア教育プログラムの実践例―

1. はじめに

今年度の春学期に開講した「キャリア・Re-デザインⅡ（以下、本科目）」は、「キャリア・Re-デザインⅠ（以下、Re-Ⅰ）」において自律へのきっかけをつかんだ受講生が、フラットで支援的な授業環境のもと、ラジオドラマ制作という自己表現を通じて、自己および他者との対話を深め、自己理解・他者理解を促進することで真の自立に向けて歩みだすことを支援するキャリア教育プログラムである。春学期は8名の学生が受講し開講された（秋学期は予め定められた開講要件である受講生5名に満たなかったため不開講となった）。

本稿では、本科目の概要とプログラム、そして本科目の中で見られた対話の事例を示した上で、授業の中で起こったことを紹介する。また、授業終了後から8ヶ月が経過した3月14日と15日に、元受講者が集まって合宿を行った。その場で本科目のことを振り返る座談会を実施する機会に恵まれたため、本稿ではその場で語られたことを一部紹介し、本科目の成果の一端として共有したい。

なお、本科目は次年度「Re-Ⅰ」科目と統合され、「キャリア・Re-デザイン」という科目に生まれ変わる。ただ、そのプログラムのほとんどは「Re-Ⅰ」を継承するため、本科目は実質的に閉講となる。本稿ではそのことを踏まえ、本科目の取組みを形として残すことを主たる目的としている。

2. 本科目の概要

本科目は、「（「Re-Ⅰ」での体験）をさらに深化させ、言語を中心とした自己表現という枠組みの中で、他者との対話（価値観を問われるような、肝心な話をすること）と自分との対話（他者との対話を通して自らの価値観を整理すること）を繰り返し行うことで、個としての自己を活性化し、自らの力で他者との関係を築きつつ自立した大学／社会生活を営むことができるようになることを支援します。」とシラバスに記載されている通り、言語表現を通じて対話を深めるキャリア教育プログラムである。基本的に、「Re-Ⅰ」の単位修得者のみ履修できるが、「Re-Ⅰ」と違って学部が定める制限登録外で履修することはできない。

運営は、教員1名とF工房スタッフ1名の計2名が、ファシリテータのスタンスでかかわっている。授業は、2コマ連続の教室授業と、1泊2日の合宿授業を交互に実施する形でスケジューリングされており、合宿授業は2回実施する。なお、プログラムの詳細は表1に示した通りである。

本科目が「Re-Ⅰ」と大きく違う点は、「言語を中心とした自己表現という枠組みの中で、対話を試みる点」であり、それを可能にしているのが本科目の特徴でもあるラジオドラマ制作のワークショップである。本ワークは、受講生個人がオリジナルのラジオドラマのシナリオを作成し、それを演じて録音したものをみんなで鑑賞する一連のプロセスを辿る中で、自己および他者との対話を実現している点にオリジナリティを見出すことができる。

ラジオドラマの台本作成までの過程は以下の通りである。

（1）ラジオドラマのコンセプトを140字でまとめる

(2) コンセプトを400字のプロットに変換する。ただし、以下の点を意識する。
　(a) プロットの中にフィクションを織り交ぜること
　(b) 語りは全て三人称で表記すること
　(c) 登場人物と場面設定を明確に示すこと
(3) プロット内容について合評会を行い、リアリティと整合性の有無を指摘し合う
(4) プロットからスクリプト（台詞など）に落とし込み、台本を完成させる
(5) 配役を決め、録音する。ただし、以下の点に留意する
　（ア）配役は作者が決定するが、作者は出演しない（ナレーションは可）
　（イ）配役決定後リハーサルを行い、そこで作者は演技指導することができる
　（ウ）録音は一発録りとし、NGの場合は最初から録り直す
(6) 全員で鑑賞した後、作者が作品のこだわりや完成度について語り、演者は演じた感想を述べる
(7) もう1回全員で鑑賞し、その後は作品の内容について合評会を行う。
※各作品とも二度鑑賞することにしているのは、1回目の鑑賞時は作者も演者も演技の部分に気を取られてしまうためである。2回目の鑑賞ではより深く作品の内容について精査することができるため、2回鑑賞することにしている。
(8) 合評会までの一連の流れを個人で振り返り、ふりかえりシートにまとめる

3. 授業の特長

本科目の特長は、授業内に何度も「対話」を巻き起こすことで、受講生が自立的に大学や社会生活を営むことができるよう支援することである。ここで言う「対話」とは、【他者との対話（自身の価値観を問われるような、肝心な話をすること）】と【自己との対話（他者との対話を通して自らの価値観を整理すること）】の2つ意味を含む。

本科目では、この対話を起こすための工夫としてラジオドラマ制作のワークショップを行っているわけだが、ラジオドラマが対話を促進し得る要因として、以下の3つが考えられる。

1) プロット作成およびスクリプト作成の段階で、登場人物の語りを一人称から三人称、三人称から一人称に変換している。このプロセスは自己との対話を促し得る。
2) フィクションとして作成することで、作者は自分の価値観を表明しやすくなり自己開示が促進される。また、セリフだけでなく、場面設定や登場人物のキャラクター、文体や行間などから本人の価値観がにじみ出るため、合評会での対話が起こりやすくなる。
3) 作者と演者が違うことで、劇中の人物像より行動の方にフォーカスがいき、合評会の際、単なる作者批判に留まらない幅広い対話が期待できる。

実際に授業内の例を紹介する。ある学生は、「Re-Ⅰでの体験を振り返る」ラジオドラマで、〈現実の自分〉と〈自分の中の理性的な部分〉とのやり取りを通して、「Re-Ⅰ」を振り返るシナリオを作成した。〈理性的な部分〉が〈現実の自分〉に「Re-Ⅰを取る前の自分」や「Re-Ⅰで印象的だった出来事」などを質問していく。それに〈現実の自分〉が答えながら、本人のRe-Ⅰでの学びや変化が明らかになっていくという構成になっており、思わず聞き入ってしまう作品である。〈現実の自分〉と〈自分の理性的な部分〉のキャストを別にし、さらにジェンダーも別にしたことで、聞き手にその対比がより明確に伝わる工夫もあった。

コマ	授業回数（形態）	テーマ	プログラム
1 2	1回目（教室授業）	・科目の趣旨を共有し、受講生間のネットワークをつくる。 ・Re-Ⅰで体験したことをラジオドラマにすべく、言語化を試みる。	・オリエンテーション ・アイスブレイク「ニックネーム付け＆覚え」 ・ペアインタビュー「トホホな自分とスバラシイ自分」、「Re-Ⅰで何を体験したのか」 ・個人ワーク「Re-Ⅰの体験を140字のコンセプトにする」
3 4 5 6	2回目（合宿授業）	・Re-Ⅰでの体験にまつわるラジオドラマ制作を通じて、自分の大学生活における節目を客観的に把握する。	・アイスブレイク「めいく！五・七・五」 ・個人ワーク「140字のプロット作成」 ・グループ別「プロット合評会」 ・個人ワーク「スクリプト作成」 ・グループワーク「スクリプト校正」 ・全体ワーク「配役決め、リハーサル、録音」 ・合宿まとめ
7 8	3回目（教室授業）	・ラジオドラマの合評会を通じて、自己および他者との対話を促進する。	・ラジオドラマ鑑賞 ・ラジオドラマ合評会 ・ラジオドラマ制作のふりかえり
9 10	4回目（合宿授業）	・過去を振り返りながら自身の転機を整理し言語化する。 ・新たなラジオドラマ「私の転機予報」制作を通じて、各自の自立への道筋を探る。	・アイスブレイク「私が1番誇りに思う関係」 ・講義「節目（トランジション）について」 ・個人ワーク「節目マップを作ろう」 ・全体ワーク「私のターニングポイント発表」
11 12 13			・個人ワーク「私の転機予報コンセプト作成」 ・全体ワーク「コンセプトを練り上げるための対話セッション」 ・個人ワーク「プロット作成」 ・全体ワーク「プロット発表、合評会」 ・個人ワーク「スクリプト作成に向けて」 ・合宿まとめ
14 15	5回目（教室授業）	・ラジオドラマを全員で共有し、自己/他者の人生・職業観について意見交換することで、自立への基盤を再構築する。	・ラジオドラマ録音 ・ラジオドラマ鑑賞、合評会 ・授業まとめ
補講	追加授業（自由参加）	・ラジオドラマを録音できていない人対象	・ラジオドラマ録音 ・ラジオドラマ鑑賞、合評会

（表1）本科目のプログラム

ただ、この作品の興味深い点はシナリオの構成だけではない。この作品の合評会では、メンバー全員を巻き込んだ活発な対話が展開された。それは、〈現実の自分〉があまりにも簡単に変化している点や、（世間一般の価値観に染まった）キレイゴトを語っている点について、他のメンバーが指摘したことから始まった。その後、全体でかなり深い意見交換が展開された。この会の振り返りで、作者は「このエピソードはとても劇的なものだと思っていたのだ

けれど、そうではなく、どこか自分で美化して、それを劇的な変化として自分のモチベーションにしていたのかな、と気付きました。」と書いている。

このように、ラジオドラマ制作の後に合評会を行うことで、より深い自己および他者との対話が可能になり、本人を縛っている価値観を問いなおすきっかけを提供している。実はこの合評会の重要性は、我々運営側も当初想定しておらず、授業での実践を通して知ることができた。このことは我々運営側にとって大きな成果であった。

4. 授業を振り返って

最後に、本科目を取った学生は、この科目のことをどう評価しているのだろうか。授業終了後 8 ヶ月が経った時点で行われた合宿で、グループインタビューを行い本人たちに問いかけてみた。すると、実に興味深い 2 つの回答を得ることができた。

●コンテントよりプロセスを重視

この授業の印象を聞いていると、「とても楽しかった」、「普段話さないような話ができた」、「仲の良い友達とは喋らない話ができた」と言う。特に「仲の良い友達とは〈結果〉の話をするけれど、この授業のメンバーとは〈過程〉の話をする」という言葉が印象的だった。

また、この授業を取ったことで何か変化はあったかと聞くと「人の意見に耳を傾けられるようになった」や「他者のことも自分事として捉えられるようになった」などの意見があった。その中で気になったのは、「人と話をする時、話の内容そのものではなく、その人の背景を想像したり、その人はどういう思いで話しているのかを考えたり、どういう気持ちでその言葉を選んでいるのかを気にするようになった」という意見だった。このような主旨の話を少なくとも 3 名がした点に、この科目の成果が見え隠れする。つまり、受講生は授業での体験を通じて、人間関係の〈コンテント的側面〉ではなく〈プロセス的側面〉に目が行くようになったと言えるかもしれない。これは上の「仲の良い友達とは〈結果〉の話をする」という意見と連関して大変興味深い指摘である。

●共通点の多さではなく、違いを認め合えているかどうか

また、メンバー全員が異口同音に「クラス内に信頼関係があった」と答えたので、その要因を尋ねると、「みんな単位が足りていないという共通点があって安心できるから」と返ってきた。しかし、その後に「むしろ、このメンバーは〈違う〉ことが前提にあるので、何でも話せるのではないか」、「みんな低単位だけど理由は全員〈違う〉わけだし」、「同調圧力が働いていないので、人と〈違う〉意見も気楽に言える」など、それぞれが〈違う〉ことを共有しているからこそ信頼関係が築けたのではないか、という彼らの分析は、大変興味深いものであった。

いずれの振り返りも、人間関係にまつわる内容に偏っていたことが特徴的である。ただ、ラジオドラマ制作という、一見すると個人で黙々と作業するだけに思えるこのワークショップが、その過程でメンバー同士の信頼関係を構築し、人とのかかわり方を再考する機会を提供し、より深くより豊かな人間関係構築に向けた意欲を引き出している可能性が示唆された。今後、さらに検討を重ね、2015 年度からの「キャリア・Re-デザイン」に活かしていきたい。

F 工房担当コーディネータ　中西勝彦

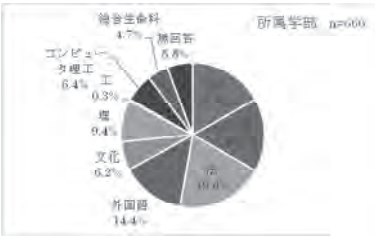
2. 2014(平成 26)年度 ファシリテーション認知度調査

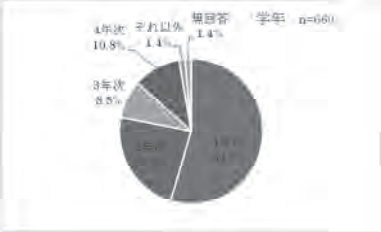
□概要

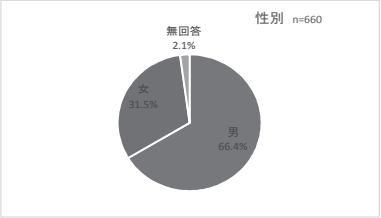
［監　修］鬼塚哲郎（文化学部教授）　［調査者］F 工房／教育支援研究開発センター
［日　時］2014 年 7 月　［対　象］学生 660 名；教職員 215 名
［目　的］本学内でファシリテーションがこの 3 年間でどの程度波及したかを調査する。具体的には、2011 年に実施した「ファシリテータマインド認知度調査」と出来る限り同一の質問項目を用いることで、この 3 年間に、本学学生においてファシリテーションにかかわる認知がどの程度変化したかを見る。今回は教職員対象にも同じ調査を実施することで、学生との比較検討を行う。
［調査方法］質問票調査（5 件法）調査員:F 工房教職員 授業時間内調査/Web 調査
［調査項目］I. ファシリテーション認知度調査
(1a)「対等場」認知度調査　(1b)「自己容認場」認知度調査
II. ファシリテーション必要性調査
(2a)「対等場」必要性調査　(2b)「自己容認場」必要性調査
III. F 工房関連イベント、科目認知度調査

□調査結果（学生対象）

属性：2014（平成 26）年度春学期に開講されている共通教育科目のうち、5 科目を選択し、担当教員 5 名にアンケート調査を依頼した。選択の基準は「なるべく全ての学部の全ての学年が履修している科目」であった。660 件の回答が得られ、男女比および学部間のバランスは実人数と相関する傾向がみられた。一方、回答者はすべての学年にまたがっていたものの、1 年次生が過半数を占めた。

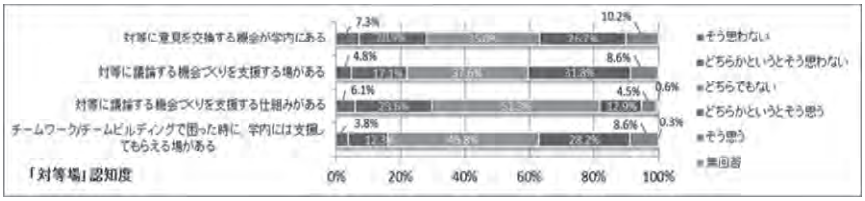






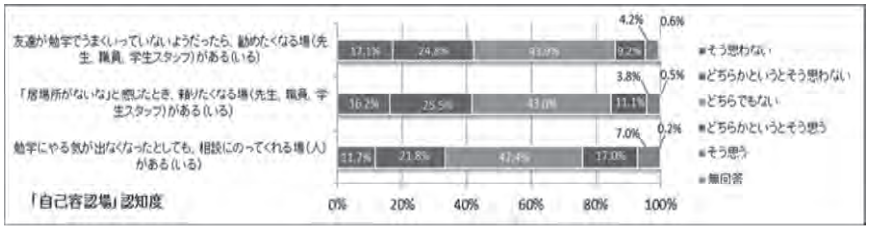
I. ファシリテーション認知度調査の結果
(1a)「対等場」認知度調査

対等に意見交換できる場についての認知度を計る調査。今回新設された「チームワーク/チームビルディング支援場がある」という質問に対し肯定的に答えた人の割合が 36.8% に達しているのは注目に値する。また、結果は図示されていないが、クラブ・サークル所属者の対等場認知度は有意に低い。



(1b)「自己容認場」認知度調査

今のままの自分を受け入れてくれる「居場所」があるかどうかを問う。前項と同じく、「どちらでもない」が最多だが、

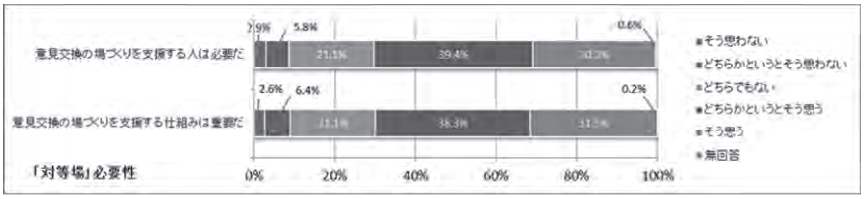


「そう思わない」「どちらかというとそう思わない」がこれに次ぎ、断定は避けつつも、「居場所」はないのではないかと感じている回答者像が浮かび上がる。このような傾向は3年前と比べて変化はない。

II. ファシリテーション必要性調査

(2a)「対等場」必要性調査

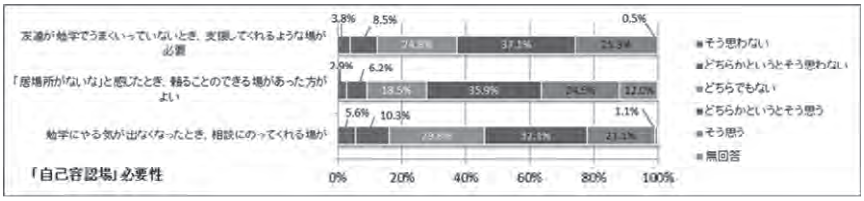
対等な関係での意見交換の場が必要かどうかを問う。ここでは、そうした場や仕組みを必要と考える回答者像がくっきりと浮かび上がる。



この傾向は前回調査と変わりない。なお、結果は図示されていないが、クラブ・サークル所属者の対等場必要度は有意に低い。

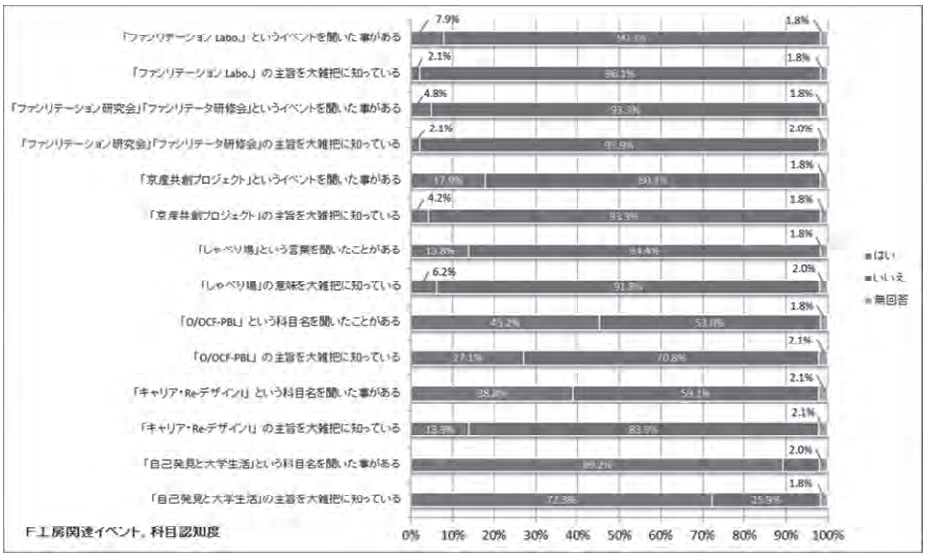
(2b)「自己容認場」必要性調査

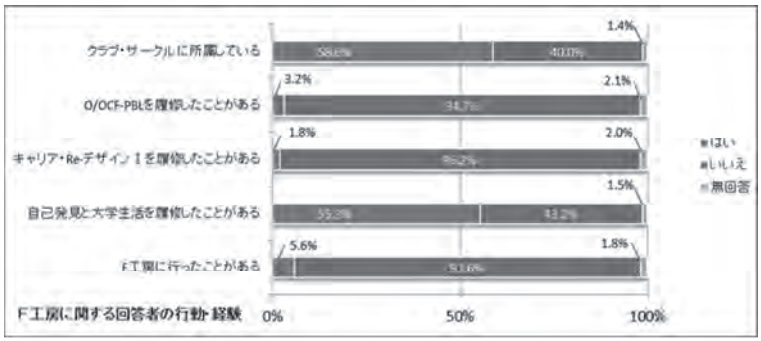
個人の問題解決を支援してくれる「居場所」の必要性を問う。前項と同じく、そうした場や仕組みを必要と考える回答者像がくっきりと浮かび上がる。



III. F工房関連イベント、科目認知度調査

関連するベントや科目について、認知度を尋ねた。F工房単独のプログラムは認知度が1割以下であるのに対し、教育支援研究開発センターが主催し、F工房が側面から支援した「京産共創プロジェクト」の認知度は2割弱であり、前回の水準は下回ったものの、依然として高い水準にある。関連する3つのキャリア科目は4〜9割の高い認知度を得ていることがわかった。





また、実際これら2つの科目を実際に履修したことがあると答えた学生は、「キャリア・Re-デザインⅠ」1.8%、「自己発見と大学生活」が55.3%であった。このことから、ファシリテーションの普及という視点からみると、授業という環境のなかでファシリテータに触れ、その後F工房の提供するプログラムに触れることを通じてファシリテータマインドを獲得するという流れが見えてくる。「自己発見と大学生活」は初年次教育的キャリア科目であり、受講生の数も多い（本年度2,175名、前回調査時の約3倍）ことから、キャリア科目群の基幹的な役割を果たしており、今後のファシリテーションの普及に大きな役割を果たすことが期待される。

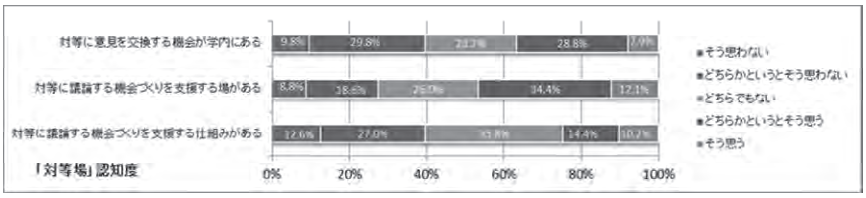
□調査結果（教職員対象）

学生対象の調査と同じ時期に、同一の質問票を用いたWeb調査を教職員に対して実施した。教員72名、職員143名が回答し、男女比は56：44であった。

I. ファシリテーション認知度調査の結果

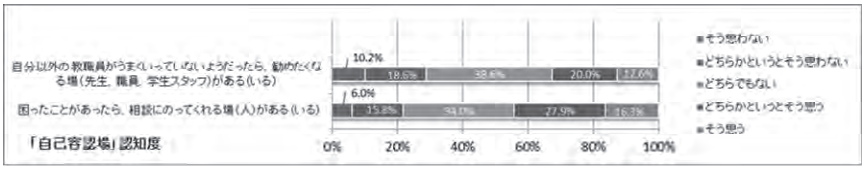
(1a)「対等場」認知度調査

学生に比較して明らかに認知度は高い。



(1b)「自己容認場」認知度調査

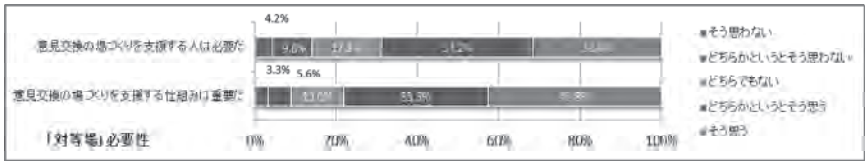
ここにおいても、教職員における認知度ははるかに高い。



II. ファシリテーション必要性調査

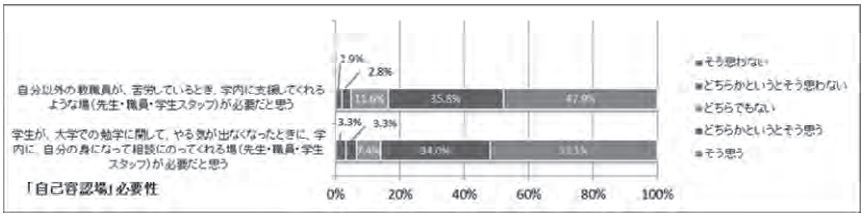
(2a)「対等場」必要性調査

教職員の7〜8割は対等に意見交換できる場が必要だと考えていることが見て取れるが、学生の結果と大きく変わるわけではない。

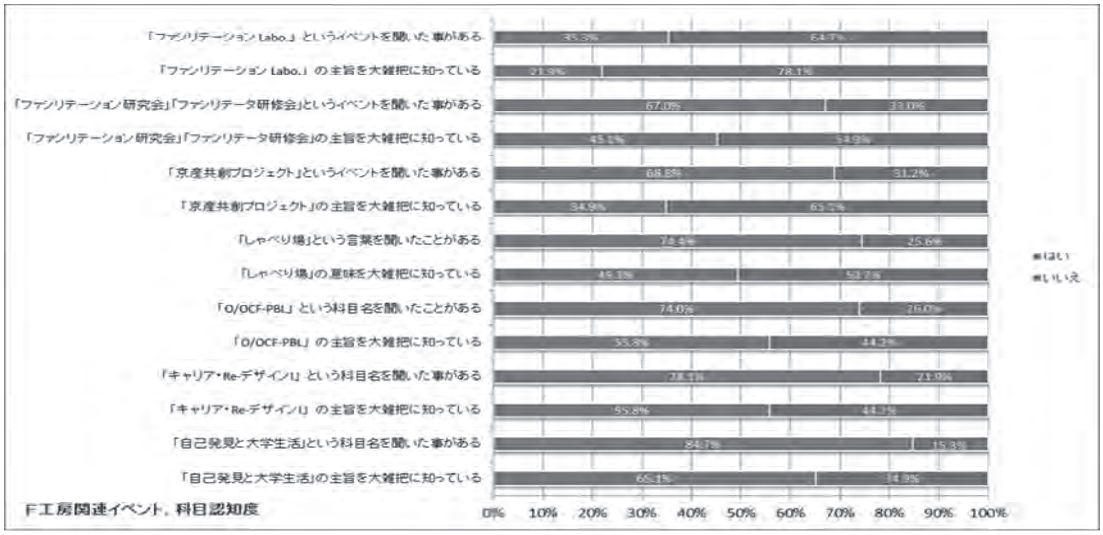


(2b)「自己容認場」必要性調査

いずれの項目においても、大多数の教職員が支援の仕組みが必要と考えていることが見て取れる。



III. F 工房関連イベント、科目認知度調査



いずれの項目においても学生の認知度を大きく上回っており、このような活動に対する学生の関与の低さが明らかとなった。

□結論

本調査を実施したことにより、以下のような示唆を得た。

① 約 7 割の学生が指導的でない、対等な関係性のなかでの意見交換の場を必要だと考えているが、実際にそのような場が学内で提供されていると感じている学生は 4 割弱にとどまる（前回調査では 3 割）。

② 上記①をクラブ・サークルに所属する学生にフォーカスして分析すると、対等な関係性のなかでの意見交換の場を必要と考えている者、実際にそうした場が提供されていると感じている者、いずれの場合においても、一般学生に比較して遙かに低い割合にとどまる。この傾向は前回調査とまったく同じである。

③ 上記①の同様、「居場所」については 53～62％の学生が必要と考えているが、実際に学内で提供されていると感じている学生は 13％～24％にとどまる。ただし「どちらでもない」が 4 割強を占めることも考慮に入れておく必要がある（前回は 3 割）。

④ F 工房が主催する「ファシリテーション研究会」「ファシリテータ研修会」「ファシ Labo.」などのプログラムに関する学生の認知度は、聞いたことがある約 5～8％。またF 工房に行ったことがあるも約 6％であり、F 工房自体の認知率は 1 割程度と考えられる。

⑤ ファシリテータが授業運営に参加する 2 つのキャリア形成支援教育科目（「キャリア・Re-デザイン I」と「自己発見と大学生活」）は、認知度がそれぞれ 39％と 89％、科目の主旨を知っている者がそれぞれ 14％と 72％、実際に履修した者がそれぞれ 2％と 55％である。これら 2 つの科目ともに履修した学生はほとんどいないと判断されるゆえ、授業中にファシリテーションに触れた経験をもつ者は 6 割程度と考えられる。この数値は前回調査（3 割程度）に比べて大幅に増加している。この増加は、「自己発見と大学生活」の受講生がこの 3 年のあいだに約 3 倍に増加したことによると考えられる。

活動を振り返って

今年度の活動を振り返ると、実に様々な成果を見ることができる。F工房開設当初とは比にならないくらい、様々な組織との協働が実現でき、ファシリテーション普及を通じて多くの人をつなぎ、多くの人の「前のめり」を引き出してきた。詳細は、第1部の各項に譲るとして、本稿では、これまで6年間にわたるF工房活動を振り返って、F工房の考えるファシリテーションついて考えることにしたい。

F工房が考えるファシリテーションとは「他者を想像し、場を創造する」ことである。その目的は、新たな知を生み出すためであり、いま、ここにいる他者への想像力を働かせながら、安心して自分を表現し相互作用が深まる場を創造する。これこそが、我々の考えるファシリテーションであり、それを実現するために奮闘するのがファシリテータである。

そして上記の理念を実現するために、大切にしている4つの態度がある。それは、(1) フラットな関係、(2) 支援するこころ、(3) 引き出すわざ、(4) 振り返る習慣である。(1) フラットな関係とは、場に集う人の役割や属性、立場は脇に置き、その場では互いに一人の人として尊重し合う前提をつくることを言う。(2) 支援するこころとは、指導や統制的態度ではなく、主体者を支援する心がけを言う。特に、学生を教える客体に据えるのではなく、学生が学ぶ主体となるために働きかける姿勢のことをF工房では強調してきた。(3) 引き出すわざとは、引っ張るのではなく引き出すことを念頭に置きながら、他者の意見や場の相互作用、参加者の「前のめり」な姿勢などを引き出すわざのことを総称している。(4) の振り返る習慣とは、その場の様子やファシリテータとしての自身の言動を振り返り、言語化したうえで、次の機会に応用することを指す。

とりわけ、我々が大切にしているのは、「プロセス」を振り返ることである。場のプロセス、すなわち、どのような段取りで内容が産出されたか、どのような相互作用が起こっていたのか、発言するまでの心の動きはどのようなものだったか、など、コンテンツが生み出されるまでの様々な過程を振り返ることを我々は大切にしている。それは、より良いコンテンツを産出するためには、より良いプロセスを経ることが不可欠だからであり、ファシリテータはこうしたプロセスに目を向け、そこに働きかけることが求められるからである。

グループワークを行った後にその振り返りを行うと、多くの学生は「何を話した」「何が決まった」ばかり振り返るし、教職員もコンテンツに注目する。ただ、振り返る意味はそれだけではない。グループ活動という複雑な相互作用が働く場を振り返ることで、人と人との関係の深さや豊かさ、人の思考の多様さなど、プロセスから得られる学びは計り知れない。我々はそうした「プロセスからの学び」を体験しながら、大きく成長する人々の姿を多く目撃してきた。そしてもちろん、我々自身もその例外ではない。

このように振り返ると、F工房はこれまでの6年間を通じて、プロセス志向の考え方を大学に普及してきたと言えるかもしれない。すなわち、「学びのプロセス」を支援することに加え、「プロセスからの学び」も支援してきた、ということである。学生の成長を取得単位数やGPA、TOEICの点数や内定獲得数で計れないのと同様に、集団での成果を結論や話し合いの内容だけで計ることはできない。F工房が掲げる「他者を想像し」という理念は、多様で複雑な「人」という存在をじっくり考え、そして尊重することを通じて、より良い社会を創っていくことを目指す、我々の強い思いと確かな信念が込められている。

F工房担当コーディネータ　中西勝彦

参考資料

今年度も、F 工房は学内の多くの現場に「参加型の場」を創出してきました。

そしてその場では、参加者の笑顔や前のめりの姿勢、他者と向き合い、

課題と対峙する人々のイキイキとした姿を多く見ることができました。

巻末ページでは、その様子の一端をご紹介いたします。

1. ファシリテーションの実践事例

■アイスブレイク

【クラス全体】
クラス全員の緊張をほぐすため、みんなで円になってアイスブレイクを行っている様子です。写真は「キャッチ」というワーク中です。真ん中にいるファシリテータがワークを進めています。

*イタリア語エキスパートⅠ

【ペアワーク】
アイスブレイクにペアワークは欠かせません。みんなの前だと緊張するけれど、1 対 1 で話してみると意外に話ができるものです。短時間に多くの人と話をするように工夫すると教室内も盛り上がります。

*ファシリテーション Labo.(2014)

【屋外でのアイスブレイク】
天気の良い日は屋外でアイスブレイクをしてみるのも手です。写真は、全員で円になってニックネームを呼びながらボール投げを行っている様子です。開放感がある中でのアイスブレイクは、緊張をよりほぐしてくれます。

*ファシリテーション Labo.(2014) 合宿

■グループワーク

【長机 2 つで島を作る】
写真は「ほげげ語ゲーム」というコミュニケーショントレーニングを行っている場面です。長机 2 つを合わせてグループワークを行うための島を作る、オーソドックスな形です。

*法学部演習（久保先生）

【移動式個人机】
移動式個人机形式でも、それを合わせればグループワークを行うことが可能です。模造紙などを広げることはできませんが、グループの一体感をつくるには最適かもしれません。

*文化学部スターティング・セミナー2014

【ラーニング・コモンズ】
グループワークに適した環境は、その環境を最大限に活用したいところです。写真は、ホワイトボードと模造紙と付箋紙を活用してグループで話し合いを進めている様子です。

*ESS×F工房　コラボ企画　第1弾/
チアパーソン向上セミナー

■共有、発表

【全体の前で発表】
グループで話し合ったことを全体の前に出て発表しているところです。オーソドックスな発表の形と言えるでしょう。

*学生 FD スタッフ燦(SAN)メンバーへの
ファシリテーション研修

【近くのホワイトボードを活用して】
グループで作成した模造紙を近くのホワイトボードに貼り付けて、全員の前で発表している様子です。ラーニング・コモンズなど、「上座」が存在しない場所では、その場で発表するのが最適と思われます。

*ESS×F工房　コラボ企画　第1弾/チアパーソン向上セミナー

【聞き手が移動する方法】
発表者が前に出て発表するのではなく、聞き手が発表するグループの近くに移動して発表を聞く形です。この方が時間短縮につながる場合があります。

*ファシリテーション Labo.(2014) 合宿

■学生ファシリテータの活躍

【発言を促す】
大教室の授業でマイクを持って受講生の意見を聞いて周ります。先生が聞くよりもリラックスして答えられるようです。

＊大学生活と進路選択

【進め方を例示する】
ワークの進め方を説明しているところです。学生ファシリテータ自身の自己紹介も交えながら説明することで、参加者も理解しやすくなるようです。

＊文化学部スターティング・セミナー2014

【モデルになる】
アイスブレイクを進行している場面です。同じ学生がアイスブレイクを堂々と進行する様子は、受講生にとっても良い刺激になっているようです。

＊入門セミナー（文化学部/久米先生）

【グループワークを促す】
グループワークが停滞したり、行き詰まったりしているところに、先輩学生がそっと寄り添い、話しかけるだけで、話し合いが再び始まる場合があります。

*自己発見と大学生活

【質問に答える】
先生には聞きづらいようなことも、先輩学生なら質問しやすい場合があります。先生と受講生の間に立つことも、学生ファシリテータの大きな役割です。

*大学生活と進路選択

【観察する】
グループ活動の様子を観察して、後にフィードバックすることもあります。同じ学生からのフィードバックは、リアリティをもって受け止められるでしょう。

*入門セミナー（文化学部/久米先生）

2. 広報物作成

２０１４年７月作成　Ｆ工房紹介リーフレット

［上］表面　［下］中面

3.「ファシリテーション Labo.(2014)」ルポルタージュ作成

ファシリテータ・トレーニング連続講座のルポルタージュを各回ごとにまとめています。
各回の講座状況をイメージしたり、アイスブレイクやワークの参考にお使い下さい。
内容は本学 HP でご覧いただけます。
http://www.kyoto-su.ac.jp/path/career/f/labo/

また、アイスブレイクのみをまとめたアイスブレイク集も掲載予定。

■ルポルタージュサンプル■

4. 発表資料（大学コンソーシアム京都 第20回FDフォーラムより）

京都産業大学　F(ファシリテーション)工房の教育改善における役割

～ファシリテーションLabo.（ファシリテータ・トレーニング）連続講座（26時間）の実施報告～

水野　直子（学長室　グローバル化推進室）・ 大谷 麻予（共通教育推進機構　コーオプ教育研究開発センター　F工房）・
中西 勝彦（共通教育推進機構　コーオプ教育研究開発センター　F工房）・鬼塚 哲郎（文化学部　教授）・石田　悠（法学部3年次）

F(ファシリテーション)工房とは？

京都産業大学では、2005年以降、ファシリテーションの考え方を組み込み、支援型教育の実践を目指す。キャリア形成支援教育科目「キャリア・Re－デザイン Ⅰ・Ⅱ」を開講している。本科目を通じて、ファシリテーションは、学生の個の活性化と自律を支援するために極めて有効であった。大学教育における個の主体性を引き出すファシリテーションが発揮することをめざし、2009年4月に「F工房」が設立された。授業や課外活動、研修等において、教職員・学生に、ファシリテーションを織り込んだプログラムを提供している。2013年度秋学期にファシリテーションLabo.連続講座が実施された。

ファシリテーションLabo.(連続講座)の概要

ファシリテーションを体系的に学習、体験する機会の提供、ファシリテーションの学内での普及の促進、ファシリテータ層の拡充、成長を図る為、2013年度秋学期にファシリテーションLabo.連続講座を開設した。2014年度は第2回目の連続講座を実施した。

【初年度（2014年度）】　◆日時：2013年11月13日(水)～12月25日(水)（2014/10/15～12/24）（各年15回）
◆場所：京都産業大学　4号館教室、松の浦セミナーハウス（合宿）、雄飛館ラーニングコモンズ
◆参加：学生25名（2014年度：32名（学生31名、職員1名））

【2014年度プログラム】

第一回：アイスブレイクの理論的背景を学び、意義を体感する（マスを21ワーク）
第二回：ファシリテーションの機能とミッション、「４つの懸念」を低減
合宿一日目：コンテンツ(成果)とプロセス（タップロットワーク）、対話の理解、実践
合宿二日目：「参加型の場」をつくる、ファシリテーションのマインドと手法を実地に学ぶ
第四回：ファシリテータとしての心得（人権、多様性）、アイスブレイク・デザイン
第五回：受講者がデザインしたアイスブレイク実演、講評、振り返り

アイスブレイクとは？５つのアイスブレイク創作事例

対話を促進するための手段の一つ、Unfreezing（解凍）、プロセスの促進

受講生によるアイスブレイクイメージ　　徐々に溶かしていくもの

ファシリテーション Labo.の効果―受講生が試みたファシリテーション導入事例

学生による実用事例
・ゼミ活動
・課外活動
（学内各種ワークショップ、学生 FDイベント、ボーイスカウトなど）

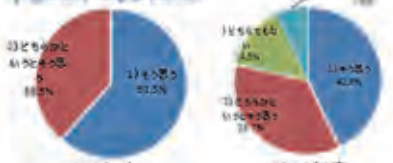
結果・実感
・アイスブレイクの習得、実践
・学んだことが活かせている実感
・他の学生の役に立っている実感

授業事例：グローバル・ジャパン・プログラム(英語開講)「日本の科学技術」

問題点：　受講生間の対話、インターアクティブな学びの機会が不充分
実　践：・アイスブレイクの導入（受講生のダイバーシティを考慮し、自己開示を促す）
・Think-Pair-Share：一人での熟考、停止・保留時間の拡大
効　果：　学生間のインターアクションの増大(アイスブレイクの実感)

成果と今後の課題

ファシリテーションについて体系的に学ぶことができましたか



2013年度（N=13）　　2014年度（N=14）

【成果】
・アイスブレイクの創作活動を通じた、ファシリテータマインドの強化
・学生ファシリテータの増大、重層化、ファシリテータマインドの浸透
・学生主体のワークショップ活動の促進（F工房、雄飛館ラーニングコモンズ、学生FD活動）
・ファシリテーション経験を有する学生のエンパワーメント、学内のAgents of Change
・教・職・学生間の対話の促進

【課題】
・途中からの参加者の減少（特に2014年度）
・実践の経験、学生ファシリテータとしての熟達（Mastery）にむけた支援の継続
・学生主体のワークショップの活性化
・FD・SD活動へのメインストリーム化：教授活動とファシリテーションの親和性・シナジー

Keep Innovating.
京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY
2015年、創立50周年

平成２６年度　Ｆ工房活動報告書

平成 27 年 3 月 31 日発行

発行・編集　京都産業大学コーオプ教育研究開発センターＦ工房
〒603-8555　京都市北区上賀茂本山
TEL：075-705-1963　　FAX：075-705-1976
E-mail：ksu-f-acilitator@star.kyoto-su.ac.jp

Facilitator Mind
京都産業大学
コーオプ教育研究開発センター　Ｆ工房